
ある国王の女装趣味に対する一考察

菩提樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある国王の女装趣味に対する一考察

【著者】

「3286」

【作者名】 菩提樹

【あらすじ】

女装趣味のある国王と、そんな国王に振り回せれたり共感したりする周囲のばかばかしいお話。

ある貴族の女装趣味に対する一考察

長年、我慢していたがもうこれ以上、耐えるのは私の精神衛生上よろしくないと思われるので、洗いざらいぶちまけてやる。ぶちまけると言つても、公の場での告発とか暴露とかではない。

そうしてやりたいのはやまやまだが、事はあまりにも馬鹿馬鹿しく、そのくせ壮大で当事者は無駄に重要人物、といつよつこの国の中高権力者なのだ。

じつ書くと、何やら私が重大な秘密を握っていて、少しでもそれを洩らせば抹殺されかねないことを恐れているように思われるかもしれないが、それは違う。断じて違う。

そうだつたらどれほど良かつたか。

今現在、他人の秘密を知つたばかりに身の危険を感じている連中には大変申し訳ないが、私に言わせれば、秘密を握られて慌てふためく可愛げがあるだけ、まだましである。

「命が惜しければこのことは誰にも言つくな」

「わかりました」

私と奴…いや、私との方の間でこんな会話は間違つても成立するまい。

正しくは「うだ。

「言いたければ言えれば？」

「絶対に言いません」

「そこまで内緒にすることじゃ ないのに」

「内緒にすることです！あなたには恥も外聞もないのですか！」

「それって、答えが必要なの？」

「ああ、思い出すだけでも頭痛がしてくる。

ちなみにこれは朝の会議前の会話である。今朝だけではなく、ほぼ毎日のように私と陛下の間で交わされる恒例行事となつている。

出発点も着地点も変わらない会話に何の意味があるのかと思われるだろ？。私も同感だ。

しかしかつても言わなければならない、言わずにはいられないことが人にはあるのだ。たとえその相手が、百回言つてもわからぬ馬鹿であつたとしても、これは不敬罪にあたるかもしれない。後で削除しなくては。

なぜ、私が延々とこんなことを書いているかというと、積年の鬱屈が爆発しかねないから、と言つたら些か唐突だろ？が、実際、ここまで三十行近く、私は核心に触れることを避けに避けていた。

おそらく好奇心でこの手帳を開いた者はとっくに退屈して投げ出してしまっているだろ？。それはそれで結構なことだ。暴露してやる、と息巻いたものの、私としても暇人どもの暇潰しのためだけに恥をかくのは忍びない。

とはいって、こうして詳細を書き残すことを決心するまでには長く、馬鹿馬鹿しい葛藤があつた。

今も迷っている。ズバリ言つてしまつにはもう少しありそうだ。仕方がないので、私がそもそもこんな文章を書きはじめたきっかけを先にお話ししよう。

私、ルードヴィヒ・フォン・フレイザーは高貴なる家の生まれである。バルトライヤ王国初代国王陛下の代から、代々王家に忠誠をもつてお仕えしてきた一族フレイザー家の、長男として生を享けたのはかれこれ二十六年前のことだ。

以来、絶縁曲折を経て当代の国王陛下にお仕えするよくなりつたのが十一年前、公的な役職を頂いたのが五年前のことである。

現在の私の肩書は宰相補佐だ。

若輩の身でこのような高い地位を得られたのはひとえにたゆまぬ

努力のおかげ、ではなく、陛下の強権発動によるところが大きいだ
ら。

陛下が即位されたのも丁度五年前のことであり、突然の即位の不
安からよく知つた者を側に置こうとされたのだろう、と周囲も私も
思つていた。

結論から言えれば、それは大きな間違いだつた。

が、今はその話は置いておこう。

ここで重要なことは、私が陛下にお仕えした年数が約十一年に上
る、ということだ。

十一年。

ストレスが蓄積するには十分な時間ではないか。

最近の胃痛、肩こり、倦怠感の原因が陛下であることを、私は信
じて疑わない。

そのことを陛下の前でうつかり口にしてしまったのが三日前。その
場で医師の診察を受けることを命じられ、受けるまでは陛下の御前
に上がることを禁じられた。診察を受けなければ陛下と顔を合わせ
なくてもいいのか？と思いこれ幸いと政務に励んだまではよかつた
が、目の前に心配の種がないということであらぬ想像が搔き立て
られ、いてもたってもいられずに王宮典医殿を訪ねたのが昨日のこ
とである。

どう低く見積もつても推定年齢は八十歳以上と思われる典医殿が、
もじもじとほとんど歯の無い口を動かしながら下した診断は「單な
るストレス」だった。

予想していたことなので、驚きはない。

むしろなんらかの病に罹つていいよりも、ストレス性の肩こりの
方が余程ましというものである。

しかしせっかく典医殿がいるのだから、何か改善策はないかと訊
ねてみると、

「ストレスの原因を取り除くことだな」

と、何とも素晴らしい答えが返つて来た。

それができれば苦労はない。

私の仏頂面に気がついたのか、典医殿は苦笑いした。

陛下を診察する」ともある典医殿は、当然、私のストレスの原因にも思い当たつているはずである。

「まあ、なんだ。早まるでないぞ」

「どういう意味です」

「お前さんがある日突然、陛下を暗殺した罪で逮捕されてもわしは驚かん。そういう顔をしておる」

「どういう顔だ。」

「やはり典医殿も、あれはおかしいと思つていいのですね」

「それはまあ、な……誰が見てもおかしいだろつ、あれは」「陛下と話していると、おかしいのは私の方なのではないかと思えてきて、恐ろしいのですよ」

「……お前さん、相当疲れておるな」

「ええ……やはりおかしいですよね。男性が、女装をして喜ぶなんて」

「……」

「……」

「……知つておるか?」

「何をです」

「陛下が今度、舞踏会を開かれるらしい」

「何か問題が?」

と言いつつ、脳内では既に警鐘が鳴つていて

悲しいことに、こと陛下に關することでの予感が外れたことはない。

そしてそれは、この時もそうだった。

「陛下……」

「あら、ルディイ。どうしたの？ そんな怖い顔して」

執務室には陛下しかいなかつた。常と変らぬ麗しき容貌が、天使の「ことき微笑を浮かべて私を見るが、今更そんなものに騙される私ではない。

なぜなら陛下は、このどこからどう見ても貴婦人にしか見えない陛下は、正真正銘の男なのだ。

国王としてはルシアス三世で通つているが、本人は絶世の美女ルシアを名乗つてゐる。

「いつそのこと私も、陛下が女性であると今からでも思いこみたいぐら」である。その方がお互いに幸せだったのかもしれない、とすら考へることがある。

「陛下……正直にお答えください。舞踏会を開くといつのは、本当ですか？」

「あら。誰から聞いたの？ ルディイには内緒にしておこてつて言つたのに、口の軽い人もいるものね」

「そんなことはどうでもよろしい。本当なのですね？」

「ええ、本当よ」

「ではその舞踏会が、全員女装必須といつのは本当ですか？」

「ええ」

「……出席が強制といつのは？」

「当然でしよう」

何の迷いもなく陛下が言い切る。

何がどう、当然だといつのか。激しく問い合わせたい衝動に駆られるが、ここに自分で自分を見失うようでは陛下に丸めこまれるのがおちである。

「なぜ、そのような愚挙に及ばれたのかお聞きしても？」

「愚挙つて……」

陛下は苦笑する。

「ねえ、ルディイ。私、考へたのよ」

「考へたとは？」

「私は間違っていたわ」

やつとわかつたか、と安堵しかけるが、その「間違っていた」が私の思う意味とは違うからこそ全員に女装強制などと言い始めるのである。

危ない。気をしつかり持たなくては。

「私はずっと、女であることを心がけて、努力してきたわ。美しい姿、優雅な仕草、女としての心構えとは何か。考え過ぎて、夜も眠れなくなるくらいにね」

「そんなことで…」

「ルディ、お前から見て、私ってどう? どこか女として、不自然な所つてあるかしら?」

「男性なのに、ご婦人の格好をされている点が甚だしく不自然です」

「もう! そんなことはどうでもいいのよ

どうでもいいのか。

「まあ、お前に聞いたのが間違いよね。本当は褒め称えたいのに、内心の先入観が正直な意思の発露を拒むなんて、よくあることだわ」「いえ、私はこの上なく正直に」

「大丈夫。お前が本当に言いたいことはわかつてているわ。私の美しさに怖れおののいているのでしょうか? その気持ちは有難くもらつておくわ。でもね、それだけじゃ駄目なのよ」

「ばん、と陛下が机に両手を叩きつける。

その勢いに思わず後ずさりしそうになり、危うく踏みとどまる。なぜ、私が気圧されなくてはならないのか。陛下の女装にかける熱意が、私の常識を上回っているとでもいうのか。

「だ、駄目とは?」

「全然、駄目よ。確かに私は、高みに上ったわ。けれどこの間、ふと思つたの。私だけが美しくなるのは間違いじゃないかって

「…どういう意味でしきつ?」

「自分が美しくなったとしても、それは所詮自己満足じゃなくて? 私は特別なのよ、と一人で悦に入つたところで、周りの者たち

がその素晴らしさを理解していなければ、価値も半減よ。美しくなる喜びを他者に伝えてこそ、真に美の求道者として堂々と名乗りを上げられるというもよ」

私は眉間に押された。

「陛下……陛下は求道者ではなく、国王です。第一、美を伝えたいと言われるなら、女性に伝えるのが筋というものでしょう。なぜえて男性に、なのですか」

「わかつてないわね、ルディ

なぜか陛下が得意気に鼻を鳴らす。

「女性というものはね、言われなくとも自ら美しくなりとするものよ。これは本能よ！ 私を見て頂戴！ わかるでしょ？」

わかるわけがない。

「一方で、男は何？ 美を作りあげる努力をしようともしないで、つまりその価値をわかりもしないで、結婚するなら美人がいいなんてほざいているのよ？だから私は彼らに機会を与えるよ」と思ったの。自らが美しくなるうと努力する過程で、美の素晴らしさを崇高さをあやまたず理解して欲しいのよ」

私には全く理解不能の自論を語り終えて、陛下は満足げな顔をする。

……本当に、どうしてくれよつか。この阿呆。

こんなのも一応国王であり、それに相応しい権力も持っている。本気で勅命でも出せば、最終的に逆らい切れないことは目に見える。こんな馬鹿げたことで勅命を使うわけがないだろうという期待は、陛下に限つては裏切られること前提で考えなければならない。以前、陛下がドレスを新調した時など酷いものだった。

その悪趣味さと金額の凄まじさといったら、本物の王妃や女王も卒倒ものだつたろう。財務官から泣きつかれて事前に書類を抹殺したまではよかつたが、あろうことか陛下は勅命で自分の衣装に関する特別予算枠を設けようとする始末だ。

その時は何とか思いとどまらせたが、今回も下手に刺激しては何

をするかわかつたものではない。

私は策を練るためひとまず退出した。

そして今に至るまで何の解決策も浮かんでいない。

一人、陛下をお止めすることのできる人物に心当たりはあるのだが、いかんせん陛下の命に関わるかもしないと思うと決断できない。私もまだまだ甘い。

今のところ、その方のお名前を出して牽制しているが、相手はあの陛下だ。いつまでもつことか。

最終手段として拉致監禁も考慮に入れねばなるまい。

この手帳は厳重に保管しておくことにしよう。

ストレス発散のために今後も使えそうだ。思つている」とを率直に書き残すだけで、これほど心が軽くなるとは知らなかつた。読み返して、微妙な気持ちになることはなるが……。

もし陛下に耐えきれなくなつたら、これを持って隣国にでも亡命することにしよう。

四月十日

来週から国王陛下にお仕えすることになった。正直憂鬱だ。

なぜって、ルクレツィア様を放つて別の方にお仕えするなんて今まで考えたこともなかつたし、しかもそれを当のルクレツィア様本人から申し渡されるなんて思いもしなかつたからだ。

青天の霹靂つて多分、こういうことを言うのね。

ルクレツィア様は公爵令嬢で、陛下とも仲がよろしい。それで何かの折に私の話をされたら、陛下が是非とも私をと所望されたらい。

……一体、なぜ？

自慢ではないが、陛下のお目に留まるような能力は持っていない。仕事に手は抜かない自信はあっても、何か抜きんでた特技を持つているわけではないのに。容色だって、平々凡々。陛下が興味を引かれるような人間ではないと思うのだけれど。

私が自慢できることと言つたら、お化粧の腕前くらいのものだ。これだけは、誰にも負けない自信はある。

公の場では絶対に言えないけれど、国内一の美女と褒められるルクレツィア様のお顔だって、私の技術と情熱の結晶なのだ。

ルクレツィア様をお美しくするために侍女をやつていると言つても、過言ではない。

何と言つても、彼女は私の芸術家魂を刺激する稀なる素材なのだ。その素材をみすみす捨てて、殿方のむさ苦しいお顔を毎日拝見しなければいけないなんて、私が何をしたと言つのかしら。

大体（以下、まだ見ぬ国王に対する妄想が続くため削除）

四月十三日

嫌々ながらもルクレツィア様の美貌を保つため、私の培つてきた技術を同僚に伝授した。勿論、たかが一週間で伝えられるほど浅いものでもないけれど、ルクレツィア様のことが好きだから仕方がない。

侍女ごときがこんなことを言つのもおこがましいけれど、私はルクレツィア様のことを妹のように思つてゐるのだ。

なんて言つと、大抵の人にはおかしな顔をされる。

私が童顔で、ルクレツィア様は妖艶な美女だから私の方が年下に見えるらしい。

それにルクレツィア様の性格は妹と言つより姉と言つたほうがしつくりくる。表面上は。

アリーセは私に代わつて、我慢と評判のルクレツィア様にお仕えしなくてはいけないのが不安らしく、終始ぐちぐちと泣き言を吐きまくつていたのでとても鬱陶しかつた。口より手を動かしなさい。私だつて黄色がかつた緑と黄緑の違いもわからない人間に姫様を任せるのは断腸の思いなのよ、と口走つたら泣かせてしまつた。

私が泣き虫の女とけちな男を嫌いだと知つてのことなのかしら。多分知らなかつたんでしょうね。教えてあげたら泣きやんだのよしとしましよう。

こんなことではルクレツィア様がすぐに癪癩を起こすのは目に見えているのに、何を考えているのかしら、陛下つたら。

四月十六日

今日でルクレツィア様ともお別れだ。

けれど当の姫様はとても機嫌がよろしいようだった。私と別れるのが嬉しいからではなく、夜会で思い人に会えるのが楽しみで仕方がないらしい。単純な方だ。おそらく私が今日で最後ということも忘れていらっしゃるのでしょうけれど、それはそれで姫様らしくていいかもしれない。

腕によりをかけて、今まで一番美しくしてさしあげた。

心残りは姫様の恋の行方をお側で見守れないということだ。

姫様は、相手のことが好きであればあるほど本心と逆のことを喧嘩腰で口にされるという特技をお持ちなので、見ていて面白…いえ、心配なのだ。

相手の方は一見、冷たそうに見えても意識的にか無意識的にか、姫様を上手く転がしているのでまあ、大丈夫だとは思うのだけれど。

(以下、追記)

姫様を送り出して、ベッドに入っていたら真夜中になつて叩き起された。

私の安眠を妨害した張本人は、夜会におられるはずのルクレツィア様だつた。

何事かと思っていたら、突然私に抱きついて号泣されたのには吃驚した。曰く、明日になつたら私が陛下付きになることを夜会で思い出したらしく、慌てて戻つて来たらしい。泣いているのは、それを今まで忘れていた罪悪感のせいだとか。

ちなみにそれを説明してくださったのは姫様の思い人である。表情があまり変わらない方なので彼がどう思つているのかわからなかつたのだけれど、夜会を途中で抜け出すのは無礼ではないのだろうか。

だつて今夜は陛下が即位されて初めての夜会だ。

お互に顔見せ・忠誠を示すような意味もあるのでは?

姫様は後先考えないところがあるので多分そんなこと思いつきもしなかつたのでしようけれど、彼はそうでもないだろ。

それをおそるおそる申し上げてみると、「その無礼はお前が働いて返すことになつてゐる」とのお言葉が返つて來た。

私が陛下に誠心誠意お仕えすると約束すれば、今回の姫様の無礼はなかつたことにしてくださるらしい。

……そんなことでいいのかしら？

私に出来ることなどたがが知れているところに、陛下は過大評価だと思えて仕方がない。

思わずそう呟くと「すぐわかる」と姫様の思い人が苦々しい顔をされたので、それ以上に何かを申し上げるのはやめておいた。

四月十七日

今日は陛下にお目にかかつた。

何と言つか、個性的な方だつた。即位されたのが一か月前で、ルクレツィア様の侍女である私には今までお目にかかる機会がなかつたのだけれど、噂だけはいろいろと耳にしていたから、實際にお会いする前から先入観に凝り固まつていたにもかかわらず、そんなものも吹き飛ぶほど強い印象を受けた。

陛下は、とても美しい方だつた。

緩やかな金髪と田の覚めるような青い瞳がまるで絵画から抜け出てきた天使のようで、後光まで射していらした。まあ、その光は窓から差し込んできた朝日だつたのだけれど。

朝に弱い姫様とは違つて、陛下は早朝から爽やかな微笑を浮かべて私を出迎えて下さつた。

こちらまで嬉しくなつてしまつような笑顔は、天使様というよりも人懐っこい子供のようで、警戒心を薄れさせてしまうには十分だ

つた。私も思わず見とれてしまつただろひ 陛下が、女性用の衣装をお召しでなかつたら。

私の脳裏にはある噂がよぎつた。即ち、国王陛下は少し頭がおかしくらしい、とこゝう噂が。

どうおかしいのかと言つとそれには色々な説があつてとてもここには並べれない。例えば、自分が女だと思い込んでいるとか、男性を集めて侍らせているとか、女性の格好をして女王様じつこをするのがお好きだとか。

もしかして最後のが正解なのかしら?と一瞬思つてしまつてしまふません、陛下。前の二つもありうるかもしけないとも思いました。申し開きをさせていただけるなら、それまで陛下のお姿を目にしたことがなかつたせいだ。

ルシアス様は、先代国王陛下の異母弟であらせられながらも、即位されるまで表舞台に出てこられなかつた。

これだけの美貌の持ち主なのに、不思議な話だ。きっと、女装趣味のせいでしょうね。

そんなことを思つてみると、陛下はなんと私の両手をお取りになつた。仮にも一国の国王陛下が、侍女の手を、だ。

呆然としている私に追い打ちをかけるように、陛下は満面の笑みでこゝう仰つた。

「貴女に会えて嬉しいわ。ずっと待つていたのよ」

固まつてしまつた私を誰が責められるだらうか。

まさか本当に陛下は私を?なんて妄想すら一秒钟ほど浮かんだ。

陛下はそんな私に気づいているのかいないのか、続けてこゝう言われた。

「ルクレツィアから貴女の話を聞いて、ずっと会いたいと思つていたの。ルディからは止められたけど、押し切つちゃつた」

「こゝ、光栄です」

「光栄なのは私の方よ。バルトライヤーの美女の専属侍女を手に入れられたんだから」

「は？」

ぐぐ、と陛下の手に力が込められる。

「貴女の手にかかるばどんな顔でも絶世の美女になれるつて、ルクレツィアが太鼓判を押したのよ？我僕で口が悪くて無駄に上から目線で滅多に人を褒めない、あのルクレツィアがよ？これはもう私に美しくなれと神が後押しをしているとしか思えないでしょ？？？そつでしょ？」

「あ、あの陛下」

「なあに？」

と、覗き込んでくる陛下は、ドレスを着て女性のよつた言葉づかいをしていても、やはり男性にしか見えなかつた。

もともと綺麗な顔立ちをしていらっしゃるから見苦しくはないけれど、やはり骨格や何かで性別はわかつてしまつ。しかし間近でのお顔を拝見した限りでは、素質はあると思われた。私の腕前をもつてすれば、陛下を女性のように見せかけることも可能かもしれない。

気づいた時には、私は動搖していたことも忘れて陛下の手を握り返していた。

「本当に、私の腕を必要とされていますか？」

「勿論よ」

私が乗り気になつたことを察せられたのか、陛下の目に熱意が灯る。

「世界広しといえども、私以上に貴女を必要としている人間はいないわ。共に歩みましょう。同じ目的のために…」

「はい、陛下！」

誰か他の人間が居れば、呆れて止めただろう。

自分でも何かが憑いていたとしか思えない心理状態だつた。けれど私にとっては、私の腕を必要としてくれることは私という人間を認めてもらえることと同義だつた。しかも、腕を振るう対象が男性だなんて、職人魂を刺激されても仕方がないでしょ？

私の腕が本物なら、性別なんて些細な問題、いえ、問題にすらならないはず。

結局のところ、自尊心がくすぐられてしまったのよね。この陛下を女性に仕立て上げられるのは私だけ、なんて思い上がりもいいところだけれど。

そういうわけで、私は陛下の専属侍女となつた。

ある国王の天敵とはいがなる人物か

陛下が失踪された。

それはいい。いや、よくはないが、いるよりはいいと思つしかない。何しろ、例の「全員強制女装舞踏会」は未だに取り消されていない。貴族連中は当然、そんなものに出席したがるわけもなし、かといって陛下の望みとあらば無碍に断るわけにもいかないということで、毎日のように私に文句を言つてくる。陛下は陛下で、顔を合わせるたびにドレスのデザインがどうの化粧の段取りがどうのと頭がおかしいとしか思えないことを矢継ぎ早に捲し立て、私の心労を増やす手伝いに余念がなかつた。

その陛下が、今度は失踪だ。

ご丁寧に、置き手紙まで残して。

『私の主張が理解されないことにはとても傷つきました。しかしそれも私の修行が足りないせいでしょう。旨を説得するにはどうすればいいか、最善の方法を見つけるために旅に出ます。探さないでください』

手元の、しわくちゃの紙に目を落として私は眉間を押された。ちなみに、しわくちゃなのは私が一度握り潰してしまつたからである。何が悲しくて、こんな手紙を一度も三度も読み返さなくてはならないのか。

「陛下は、何か言つていたか」

「いえ、特には」

手紙を発見した侍女は、俯いて震えている。笑つてゐるのだ。咎めるべきなのかもしけないが、そんな氣力も湧いてこない。

「お前が最後に陛下に会つたのはいつだ?」

「早朝に、お化粧のためにお会いしました」

「……その時、何か変わつた様子は?」

「いいえ。いつも通りです。『今日もお綺麗ですわ』と申し上げたら、『これでルディもいちじうね』と嬉しそうに仰られて高笑いされでおられました」

「……それは、いつも通りだな」

不本意ながら、似たような現場は何度か目撃したことがある。

「行き先に心当たりは?」

「まあ閣下。私が知っているわけはありませんわ」

「そうだな……」

「でもハンバーート様なら何かご存知かもしませんわ」

「あいつか」

侍女のあげた名に舌打ちする。

ヴラジミール・ハンバーートは陛下の使つている間諜だが、元は隣国に亡していったといいうわくつきの男である。

そんな男を、陛下はどんな手を使ってか自分の部下に引き抜いてしまった。

ハンバーートの知らないことは誰も知らない、と言われるほど何でも知つている男だ。陛下の逃走先の十や二十、苦もなく答えられるだろう。

しかし私としては陛下と並んで大いに関わりたくない男でもある。なぜかといえば……いや、よその。素面で書くにはあまりにもおぞましい話だ。

「すまないが、呼んで来てくれ」

「かしこまりました」

有能な侍女が、迅速に行動するべく退出しようとした矢先、向こう側から勢いよく扉が開いた。

それに衝突して侍女はしたたかに鼻をぶつけたが、彼女を気遣う余裕は私になかった。こんなふうに扉を蹴破るような勢いで開ける人間は、私の知る限り一人しかいない。

案の定、扉の向こうから姿を現したのはエーファ・フォン・ベルハウゼン様その人であった。

エーファ様は私を視界に捉えると同時に、にやりと肉食獣のよつ
な笑みを浮かべた。

「久しいな、フレイザーの伴」

「断わつておくが、エーファ様は女性である。

それどころか先々代の陛下の妹君、つまり陛下の叔母上にあたる貴い方だ。現在はベルハウゼン公爵家に降嫁されたが、それ以前は王族ながら騎士団を率いる歴戦の戦士として名高かつた。

彼女の軍の通つた後には草一本残らず、敵軍は彼女の名を聞いただけで逃げだしたという伝説まで残つてゐる。

当時、幼かつた私にはその話が事実かどうか断言はできないが、少なくとも「本当かも知れない」と思わせる迫力が、エーファ様には備わつていた。

何しろ、陛下が唯一、頭の上がらない方である。

ああ見えて陛下も相当な剣術の使い手なのだが、エーファ様はそれを凌駕する天才だ。化け物と言つてもいい。

武力を背景に陛下を脅すエーファ様の図は、陛下にお仕えする私としては見慣れた光景である。

もつともここしばらくはベルハウゼン領に引きこもつていらして、お姿を見かけることもなかつたのだが。

「お久しぶりです、エーファ様。なぜ、ここに？」

「なに、里帰りだ。気にするな。少々、面白い噂を耳にしてな」

「面白い噂？」

「ああ。何やら我が甥が女装舞踏会を開催するらしいと聞いてな。

前にあれほど言つたのに、未だに馬鹿な振る舞いをやめないのは叔母として嘆かわしい限りだ。だから可愛い甥のために、教育的指導をくれてやりに来たのさ 盗賊討伐にも飽きてきたしな

暇潰しに討伐される盗賊が氣の毒だ。いや、法を犯す者たちに同情する必要もないのだが。

「お越しになられるのは構いませんが、連絡くらうしてもうえませんか。これで私も多忙な身ですので」

「気取つたことを言つたな。ほとんどビルシアスの尻拭い係だろ？、お

前は」

エーファ様がにやにやと笑う。公爵夫人と言つたり、居酒屋の酔つ払いのような笑みだ。

「それに私だつて連絡ぐらいした。宰相にな。だがさつき挨拶に行つたら、花粉症が酷くて早退したと言われてな。ルシアスの姿も見えん。きっと私を恐れて逃げたんだろう。軟弱な奴だ。まあ、危機察知能力は優れていると言えるがな」

私は手にしたままの手紙を、もう一度握り潰した。

女装に対する理解を得られなくて傷ついた、などというふざけた理由を信じたわけではなかつたが、なんのことはない。エーファ様が来られることを察知して逃げたのだ。うつかりそれを陛下に教えたのは宰相だろ？。責任追及を恐れて仮病を使つてゐるに違いない。そして陛下の捜索も、陛下が見つかつた場合にエーファ様を宥めるのも、私がやらなくてはならないのだ。

疲労感にぐつたりしていると、エーファ様が同情するような顔をする。

「お前も大変だな。我が甥ながら、誰に似たのか……あれの兄が生きていた時は、まあまともに見えたのだが

「まとも…ですか」

確かに先代国王陛下　陛下の兄上が生きておられた時は、陛下は女装などしていなかつた。それどころか、男らしい顔立ちとがつしりした体格の先代陛下に憧れて、エーファ様に剣術を習いたいと無謀な申し出でしらしたくらいだ。私から見ても、先代陛下は有能でおまけに人格も非常に良かつた。陛下が懐くのも理解できるし、その頃は陛下にもまだ可愛げがあつたことも否定しない。

だが、しかし。

無断で市井に遊びに出掛けたり、手持ちの金が尽きて娼館から帰してもらえなくなつたり、拳銃に勝手に私の名前を名乗つて借金を肩代わりさせようとしていた陛下がまともなんてことは、絶対にな

い。

とはいえたエーファ様は私の暗い過去になど興味はないようで、うきつきと拳を鳴らしている。

「まあ私に任せておけ。相手は所詮、あの馬鹿甥だ。ルシアスの一匹や二匹、すぐにいぶり出してやる。まずは」

そこでエーファ様の目つきが変わった。

たとえて言うならば猪が虎になつたような劇的な変化だ。

「その鼠を血祭りに上げてやろう！」

ふん！と気合の声と共に、どこから取り出したのか、エーファ様が短剣を投げつける。短剣は何もない壁に刺さつたが、「わあ」と間の抜けた声が響き、第三者の存在を証明した。

エーファ様はつかつかとその短剣の刺さつた場所に歩み寄り、なんとその壁を引き戸のように開いて、中から男を引っ張りだした。隠し部屋のようなものだろうか。確かに王宮にはあちこちにそういうものもあるが、自分の執務室にもあつたとは知らなかつた。

だがそれに驚いている暇はなかつた。なぜなら引っ張り出された男は、少し前に呼び出そうとしていた諜報員　　「グラジミール・ハンバー」ト本人だつたのだ。

ひょろりとした痩せた体型とぼさぼさの髪以外に、特徴らしき特徴の無いハンバーは、エーファ様によつて床に転がされ、「いてて」と呑気な声を上げた。

そして次に発した言葉が

「酷いじゃないか、おばさん！」

である。

私は確信した。この男の死を。

案の定、手加減なしでエーファ様に殴られて悶絶することとなつた。エーファ様はそれだけではおばさん呼ばわりが許せなかつたのか、愛用の長剣を躊躇いもなくハンバーの喉元に突きつける。ハンバーが異常にのけぞつてているところを見ると、突きつけると言うよりも押しつけているのだろう。

「いたたたた、いた、痛いってばおばさん。もつと優しくしてよ」「黙れ。貴様この私を一度もおばさん呼ばわりするとは、生きて帰れると思うなよ」

「いえ、それはどうでもいいのですが盗み聞きしていたわけを「聞いて下さい、と続けようとすると王ーファ様の眼光の鋭さに口を噤む。

「どうでもいいとはなんだ、どうでもいいとはーーこのようないの馬の骨とも知れぬ男に、この私が『おばさん』呼ばわりされたのだとぞーこのような無礼を許しては王国の威信に傷がつきかねん! ただちに処刑するべきだ」

熱弁にもほどがある。

私としてはハンバートが処刑されることには諸手をあげて賛成したいところだが、陛下の行方を捜すためには必要な男だ 非常に残念ながら。

「エーファ様の仰ることも、もつともですが、この男はこれでも腕利きの諜報です。陛下を捕まえるために大いに役に立つでしょう」「むう、そうなのか……仕方ない。大事の前には私情を殺すことも必要だからな。おい、貴様。聞いていたな? 命が惜しければ私に協力しろ」

「ええ……僕これでも王様の部下なんだけど」

「ふん。それでこそと盗み聞きか。ルシアスに見張つていろとでも言われたか? だが我が甥は失踪中だからな。お前を扱き使おうが不敬罪で処刑しようが、文句は言えん。わかるか? ここにはお前と私しかいない。何をしようが、全ては闇の中だ」

私が黙っていること前提なのか。

しかしハンバートはエーファ様の脅しにも屈しなかつた。それどころか、間の抜けた笑みで「そんな脅しに僕が降伏するとでも思つてるので、おばさん」と言い放つた。

「僕は王様を裏切らないよ、絶対にね」

「ほう。言つではないか。まがりなりにも臣下としての忠誠心はある

るということか

「そんなんじやないよ。王様はね、僕が一番欲しいものをくれるつて約束してくれたんだ。だから、僕も王様のことは裏切らない。そういう約束だからね」

「欲しいものだと？」

エーファ様は興味深げな顔をし、私は眉間に皺を寄せた。その「欲しいもの」が何なのか、私はよく知っていたのだ。

私の心中など知る由もないエーファ様は、嬉々として言葉を重ねる。

「それは面白い。言つてみる。買収が可能な相手は大歓迎だ。体に聞いてもいいが、手間がかかるからな」

「うーん、そんな大したものじゃないんだけどね……女の子」「何？」

「だから、女の子だよ。僕が欲しいもの」

「女の子……だと？ それは女が抱きたいといつことか？」

「違う違う。何聞いてたのさおばさん。よく聞いてよ。僕はね、成人する前の女の子にしか興味ないの。より細かく条件を言えば十二歳から十五歳の色白の子がいいなあ。あ、でもあんまり肉付きがいいのは嫌だね。胸やお尻は程良く未発達で、ちょっと節ばつた感じの体つきが好み。小さめの服を無理やり着てれば尚良しなんだけど狙つてやつてるんじやなくて自然にそうなつてないと燃えな」

私はハンバーートを殴り倒した。

エーファ様は咄嗟に反応できず、目を白黒させていた。

「……それは、あれなのか。犯罪ではないのか……？」

「あ、失礼だなあ。そりやー全く清い関係じゃあないけどさー双方合意の上だよ？ それに本番までは滅多にいかないし？ まあ大抵は手を握つたりキスしたり舐めたり咥えられたりで満足」

「もういい、貴様の言いたいことはわかつた。作戦会議を行う。暫しそこで待て」

と言つて、エーファ様は私に手招きする。

ハンバーートから少し離れたところで声を潜め、

「物は相談だが」

「お断りします」

「…まだ何も言つていないぞ」

「言われなくともわかります。いいですか、私は娘をあのような変態に差し出すつもりはありませんからね」

「人聞きが悪い。目的のための尊い犠牲だ」

「犠牲ということは認めるんですね」

「ただ一緒に遊ぶだけという条件をつければ問題あるまい」

「問題あります。第一、娘はまだ一歳ですよ。あの変態の好みにも一致しません」

「だが母親はバルトライヤーの美女だぞ。希少価値はあるだらう。将来性に期待ということで」

「あの変態に田をつけられたらどうするんですか！」とにかく私は断固として断ります。娘を変態に捧げるくらいなら陛下の一人や二人、野垂れ死にしようが行方不明になろうが大いに結構です」

「交渉決裂か…」

エーファ様は何やら苦々しげな顔をしつつ、ハンバーートの元に歩み寄る。そして言った。

「おい、貴様。心して聞け。特殊な趣味を持つ貴様のために、我が娘と交流することを許可してやる。その代りに、明日までに甥を捕縛しろ。いいな？」

「公爵様の娘かあー。確かに毛色が変わつてていいかもね」

「ただし」

と、気味の悪い笑みを浮かべるハンバーートに、エーファ様が指を突きつける。

「あくまでも『交流』するのみだ。手を握つたりキスしたり舐めたり咥えさせたりは一切認めん」

「ええー それの何が楽しいのさ」

「黙れ。貴様も変態の端くれなら、どんな困難な状況でもそれなり

に快樂を感じてみせる」

大真面目な顔で意味不明なことをエーファ様が言つ。

その意味不明な言葉は、なぜかハンバートの琴線に触れたらしく、奴は挑戦的な顔つきでエーファ様を見上げた。

「へえ。言つね、おばさん。そこまで言われたら本気出さないわけにはいかないよね」

「ふん。好きにしろ。私は娘の自主性を尊重しているからな。娘が本気でお前の趣味に付き合つてもいいと言うなら文句は言わんさ。ただし少しでも無理強いしたら、貴様のナニを切り落として犬に食わせてやるから覚悟しておけ」

勝手に変態と交友関係を結んでおいて自主性も何もない。

私はエーファ様の息女に同情を禁じ得なかつたが、私の力では娘を守るだけで精一杯である。聞くところによればベルハウゼン公爵令嬢は令嬢らしからぬ剣技の持ち主だという。そういう変態の思ひどおりになるような娘ではないだらう。何しろエーファ様のご息女だ。誤つて変態を不能にでもしてくれば尚良いし、そうなれば将来的に私の娘の身の安全も保障されていいこと忽くめである。

私が僅かな希望に思いを馳せているついで、エーファ様とハンバートの話は決着がついたようだつた。

急にやる気に満ちてきびきびと出でていくハンバートを見送りながら、これでいいのかと自問するも私では陛下の思考を読み切れない以上、仕方のないことなのだろう。目には目を、変態には変態を、だ。

「これで万事上手くいくな」

傍らで至極満足そうにエーファ様が腕組みをする。

上手くいくてもらわねば困る。おそらく陛下は女装のまま街中におられるだらう。恥という概念が欠如している上に、残念ながら思慮も浅い。

あれが自國の国王であると國民が知つたら、革命が起きるかもしない。

だが想像すると頭が痛くなるので、私はひとまずその「」を全て頭から追いやり、深く溜息をつくしかなかった。

今日は厄日だ。

薄々、俺つて厄病神にとりつかれてるんじゃ？とは思つてたが、今日はそれを再確認したね。

つか、仮にも国王が臣下に向かつて「私を連れて逃げて」とか言うんじえねえよ。お断りだ。お前の護衛騎士になつちまつただけでこつちは超迷惑だつてのに、この上ホモの誘拐犯になれつてか。これ以上変態が増えたらルードヴィヒが発狂するぞ。

声に出してはつきり言つてやつたつてのにルシアスは堪えなかつた。

「酷い！－－ヴェンツェルは私に死ねつていうの！？叔母様に見つかつたらどんな仕打ちを受けるかわかつてるでしょ！？」

「なんの人人が出でくるんだよ」

「宰相から聞き出したのよ。叔母様が私の企画を耳にしたらしくて、今日にも王城に来るんですけどー早く逃げなくつちやーー！」

「一人で逃げるよ」

「置き手紙は残してきたし、脱出経路はハンバートが確保したわ。早く行きましょう」

「一人で行けつゝてるだろうが！」

「本当に人の話を聞かない奴だな。耳ついてんのか。」

「お前、それでも私の護衛騎士なの？主の危機に知らんぷりなんて恥を知りなさい、恥を」

「お前が言うな！」

「そんなこと言つて、後悔しても知らないわよ

「するかよ」

「どうかしらね。もし私を連れて行ってくれないなら　　お前に襲われたつて言うわよ」

「はあ！？」

「私は仕えるべき主。身分を越えられないのに想いだけは募つてついに……ああ、私つて罪な女」

「……」

「で、どうするの？」

ふざけやがつて。世界中で人間がこいつしかいなくなつたつてお断りだつてわかつて言ってんのか、この馬鹿は。こいつの言うことなんか信じる阿呆はいまい。そうだ。俺は正々堂々としていればいいのだ。

誰が行くか。

「あの子はどう思つかしら？ほら、お前と仲のいいあの侍女の子。名前はなんて言つたかしらねえ。確かクララだつたかしら？お前が実は私を、なんて知つたら……」

俺は想像した。

こいつを嬉々として女に仕立て上げるあの侍女が、嬉々として侍女仲間にその噂を広める様を。それを本気としたエーファ様が真剣で襲いかかつてくる様を。背後でルードヴィヒが引き攣つた顔をして、ハンバーートが手を叩いて喜んでいる光景すら目に見えるようだ。勿論、事の元凶ルシアスはとっくに雲隠れしていることだろう。

「……」

「行くわよね？」

そして。ルシアスと一緒に、ルシアスと一緒に！丸めこまれた俺は街中で奴のお供をするはめになつた。なつてしまつた。

ルシアスは見た目「だけ」は美人に見えないこともないので、普段よりも地味な格好をしているにもかかわらず、結構視線を集めている。もっとも、全世界の人間に注目されたところでこいつが委縮することなんてありえない。人の視線が痛いのは俺だ。何て理不尽。

そんな俺の気持ちに配慮することなど勿論ないルシアスは、能天気に空を見上げて伸びなどしている。殴りたい。

「 なんて青い空かしら。まるで私の自由を祝福しているかのようねつ 」

「 …… 」

「 でも日差しが強いわねえ。日傘が要るかしら？ねえ、どう思ひつ？ 」

「 …… 」

「 なーに拗ねてるのよ？お前の日傘も買つてあげるから機嫌直しさい 」

「 いらねえよ 」

「 あらそう。あとで日焼けで泣いても知らないわよ 」

「 …… それはあれか？色黒な俺に対する挑戦か？ 」

「 あら、あんなところに救いの手を求める子羊が！ 」

「 人の話を聞け！ 」

逃げ足の速いルシアスはドレス装着とは思えない驚異的な速さで人ごみの方に駆けていく。俺を撒くためにそうしたのかと思ったが、奴の向かう先には本当にガラの悪い男たちに絡まれる女の姿があったので、渋々後を追いかける。

ルシアスは男共と女の間に無理やり割り込むと、「嫌がっている女の子を力ずくでじうじうしなんて紳士のすることじやなくつてよ」とまあ一応は正論を唱えた。

しかし正論でもこいつの口から言われると受け入れがたいのは俺だけか。俺だけなのか。

俺は訥然としないものを感じながらも女の側に歩み寄り、彼女が本当に女なのか確認した。こいつも実は女装した男かもしれん。五年前までの俺ならこんな馬鹿なことは考えなかつた。歳月は人を変える。

男共はまさか女一人（実際は女じゃないが）で自分たちに立ち向かつてくるとは思つていなかつたらしく、戸惑つたように顔を見合わせた。

それに調子づいたルシアスは更に演説をぶちあげた。

「いい？腕力に訴えるなら簡単なのよ。普通の男なら当然、女よりも強いわよね。でもね、それじゃあ全くロマンがないでしょ？安易な方法よりもあえて茨の道を選ぶ。その気になれば結果は手に入れられるけど、そんなことは億尾にも出さず技巧を凝らして向こうからやつてくるように仕向ける。それでこそ男つてものでしうが！」

「あのなあ」

と男の一人が呆れたように口を挟むが、

「お黙り！！」

「はい…」

ルシアスに一喝されて大人しくなった。情けない。

「貴方たちには想像力つてものが足りないわね。よくお聞きなさい。世の中には実は男になりたかった、なんて人もいるのよ？貴方たち、そんな体たらくで彼らに申し訳ないと思わないの？例えばよ、貴方たちより私の方がずっと男に相応しいわ、と言われたら胸を張つて言い返せる？」

なんのこっちゃ。

男共は狐につままれたような顔をしている。そりやそうだ。今的内容が理解できたら、そいつはルシアスの同類に違いない。

俺はわけのわからん演説の隙に、絡まっていた女を逃がすことにした。女は戸惑いつつも「ありがとうございます」と礼を言いながら去つて行つた。その背中を眺めながら、俺は複雑な心境だつた。

「いいことしたなあ」という達成感より「お前だけでも逃げる」的な自己犠牲精神をひしひしと感じるような気がしてならない。

振り返れば、「今日はこれくらいで勘弁してあげるわ」と胸を張るルシアスと、「ありがとうございます…」と疲労困憊したような男共の姿が目に入った。お疲れさん。

なんつうか、こっちまで疲れるような光景だ。いや、俺は何もしてないんだけどな。

「人助けっていいことよね

「……」

繰り返すが、正論でもこいつの口から言わると受け入れがたいのは、絶対に俺だけじゃない。

俺が初めてルシásと会ったのは、まだこいつの見た目と中身が一致していなかつた頃、つまり外見だけはまともだった十一年前だ。俺と、今は宰相補佐なんてものをやらされているルードヴィヒはルシásのご学友に選ばれた。ある程度の身分があつて年齢が釣り合つていたから、なんて機械的な理由だつたが、親父は喜んだし俺も同じ年の王弟に興味はあつた。

第一印象はな、よかつたんだよ。

当時からルシásは見た目「だけ」は良かつた。金髪碧眼のいかにも王族の若様つてかんじの美少年だ。多分、母親似だろう。俺は会つたことないが、下級貴族ながら並みいる上級貴族・王族の女どもを差し置いて「傾国の美女」の名を欲しいままにした麗人つて話だ。

で、それに目をつけたルシásの親父が、光の速さでルシásを孕ませたはいいが、当時既に王妃がいたもんだから、当然結婚はできない。この国は一夫一妻制だからな。

しかもこの王妃つてのがやたら嫉妬深い方だつたようで、どんな手を使つたか知らんが、ルシásの母親を王城から追い出しちまつたらしい。旦那の方は、まだ未練があつたようだけどな。

母親は、ルシásを生んですぐに死んだ。

ルシásはそれから父親が死ぬまでの十四年間、母方の祖父母に育てられてひつそりと生きてきたというわけだ。

俺はともかく、由緒正しい家柄のルードヴィヒがルシásに仕えようなど選ばれたのは、当時の国王陛下、つまりルシásの兄上の配慮だった。

この人がああ、めちゃくちゃ弟想いのいい人だつたんだよ。

とても無責任な親父と嫉妬深い母親から生産されたとは思えない、穏やかで誠実な人柄で、ああ、生きていたら俺は絶対こっちに仕えたかつたつていうようなまともな方だ。

何でも、即位する前からルシアスにちょくちょく会いに行つてたつて話で、自分が即位したら家族として迎えたいと思つてたとか。なんで俺がそんなことを知つてるかつていうと、直接陛下にルシアスのことを頼まれたからだ。

すげえにこにこしながら「あの子を頼むよ」なんて言つてくるわけ。あれが「あの子」ってたまかよ、つて今なら思うんだろうが、当時はまだ俺も若かつたからな、素直に「はい」とか返事してた上に、「気の毒な王弟殿下に楽しいこと教えてやらなきやな」とも思つてた気がする。

まあ、そういうわけで最初はよかつた。

ルシアスの奴も猫被つてたんだろうが、王子の割には気取つてなくて付き合いやすかつたし、むしろ堅物のルードヴィヒの方がやりにくかつた。あいつが一番、常識人なんだがな。

俺が「こいつなんかおかしいんじゃねえの?」とルシアスに対しつて思つたのは、初対面から二ヶ月ぐらい経つた頃のことだ。

その頃、ルシアスはちょうど、剣術に真面目に取り組み始めた時期で、動機は剣術の達人で体格も立派な陛下に憧れたからなんだが、いくらなんでもあの練習ぶりはちょっと異常だつたね。

剣術の指南役は、女ながらに常勝将軍と称えられていたエーファ様だつた。あの人に毎日本気で扱かれて根を上げない十四歳つて、ただものじやないだろ。少なくとも俺には無理。いつもへらへらしてくだらないことばっかり言つてるくせに、生傷だらけになつても意識を失う寸前までぶつたたかれても、泣きもしないし愚痴も言わない。

何が凄いって、そこまでして耐えてたのが全部、陛下のためつて所だよ。

「兄上のお力になりたい」が当時のルシアスの口癖だった。王弟つてことで、望めばどんな教育でも受けられる環境は整つてたからな。実際、武芸も政治も真面目に学んでいたみたいだ。

陛下はそこまで厳しく教育するつもりじゃなくて、自分の母親のせいで不遇だつた弟に対する償いのつもりだつたんだろうが、ルシアスはとにかく陛下を神格化してたからな。

曇りなく信じてたつていうか、陛下の言つことには絶対服従というか。多分、「死ね」って言われたら死んだんじゃないか。陛下も、つくづく早死にが悔やまれる人だ。あの人が言えれば、女装なんて絶対しなかつただろからな、ルシアスも。

そもそも陛下が健在なら、今ほどこいつの変人ぶりが表立つて明らかになることもなかつただろつよ。

……あ、勘違いするなよ。

陛下がいようとまいと、ルシアスがどこかおかしいのは変わりない。

なにせルードヴィヒの名前を騙つて娼館に通い詰めた拳句に、本人に断りもなく自宅に娼婦全員招待したり、いけ好かない貴族を狩りに連れ出して猪の群れの中に置き去りにしたりとか、平気でやるからな。

しかも、絶対反省しねえの。

「他人の困つた顔を見るのが好きなんだ」とほざいているのを、俺は聞いたことがある。

しかし流石のルシアスも最愛の兄上には逆らえないのか、とこゝか逆らう気がもともとないのか、陛下の前では別人かつて言つほど大人しかつた。陛下に迷惑がかかるようなことは絶対にしなかつたし、たまに咎められれば心底落ち込んでいた。

だから陛下さえ居てくれれば、俺もこんなに苦労することもなかつたんだよな……ルシアスの良心が發揮される相手が、陛下限定つてことを考慮に入れるとしても。

陛下がいなくなつた途端に、このざまだ。

ルシアスの能力に関しては、まあ意見はわかるところだろうが、俺はそこそこ優秀だと思ってる。能力自体はな。と言つても、それは陛下健在時に奴が奴らしくもなく努力しているのを傍で見ていたから言えることであつて、今のこの変人全開なルシアスを見て優秀とか賢王とか思う人間はいないだろう。

今はせいぜい要領がいいとか、その辺だな。

ルードヴィヒはじめ眞面目で手抜きをしない部下を見極める目だけは、一級品と言つてもいい。自分が樂するため、以外の目的で能力發揮して欲しいんだが。良い国を作るため、とかな。無理か。「ちょっと、ヴェンツェル。そんなところでぼーっと突つ立つてちや通行の邪魔でしょ」

ルシアスに腕を引つ張られる。

「……往来でけつたいな説教かましてたのはお前だろうが

「えー何? 聞こえなあい」

「難聴か。気の毒に」

「ちょっと! 酷いじやない! 頭だけじやなくて耳までおかしくなつたですつて?」

「聞こえてるんじやねえか! しかもそこまで言つてねえし!」

「わかつてるわよ。そんな目の前に人参ぶらさげられた馬みたにに力いっぱい食いつかなくてもいいのに。軽いじやれ合いでしょ」

しつとと言い、ルシアスは足取りも軽く歩き出す。

あああ疲れる。帰りてえ。

だがこいつを野放しにしておいてはどうなるか想像もつかない。

これでも、こんなんでも! 国王だしな。出かける前は一人で行けどは言つたが、実際に一人で行かせたら帰つてくるまで俺の胃が持たん。

俺は肩を落とし、優雅な女装野郎にとぼとぼと続いたのだった。

ルシアスが「いやつて王宮を抜け出すのは、なにも初めてのことじゃない。

王弟時代も国王になつてからも、息抜きと言い張つていなくなることは度々あつた。仮にも王宮の警備をどうやって突破してるんだか。国王になつてからは私室の隠し通路と変態諜報員ハンバートも加わつて、ますます脱走は簡単になつたことだらう。

陛下はなんだかんだ言ってこいつに甘かつたから、王弟時代は脱走したところで特別なお咎めはなかつた。

国王になつてからは尙更だ。こいつより偉い奴なんているわけないからな。

凄いのはこれだけふらふらしてるくせに、誘拐とか暗殺とかそういう不測の事態に巻き込まれたことがないことだな。どんだけ運いんだよ。更に凄いのは、王宮の連中も国王がいなくなつても誰も心配しないことだ。ルードヴィヒは頭が痛いかもしけんが。あいつもいろいろ諦めれば幸せになれるだろうに。

ルシアスは慣れた様子で、露店をひやかしたり自分に見惚れる男どもに微笑みかけたりしている（俺からすれば気色悪いだけだ）。容姿の麗しさを除けば、王族と思えない溶け込みっぷりだ。

上流階級のお歴々は庶民の生活に基本興味ないし、退屈のあまりに暇潰し目的で気まぐれを起こすことはあっても、自分の生活と程遠い別世界を覗いてみたってだけだからな。どうしてもその場から浮くつつか、場違いなところはある。

しかしこいつは見事に背景の一部になつていて。脱走歴の長さが窺えるな。

王宮に上がる前のルシアスのことば、奴自身が話したがらないので知らないが、その頃から前歴を順調に積み重ねていたと、俺は見ている。

じゃなきやこの馴染みつぶりはおかしいだろ。なんか顔見知りっぽいやつもちらほらいるし。

恐ろしいのは男も女も「今日も美人だな」とか「今日も素敵ね」と笑顔でのたまうことだ。いや、ルシアスの顔面にけちをつけたいわけじゃなく、どちらからもルシアスが「異性」として見えているらしいことが驚きなのだ。

なぜだ。

俺の周りでは完全に「変な奴」扱いなのに。「そういうえば顔は良かつたつけ」と時々思い出されているかも怪しいくらいなのに。ルシアスは、無駄な愛想を振りまきつつ、迷いない足取りで表通りから離れた路地に踏み込む。賑やかさや活気が消えて、何となくじめじめした薄暗い雰囲気が漂っている。

だが本当に気分を悪くさせるのはそんなものではなく、すれ違う人間　ぱつと見ただけでまつとうではないとわかる人間たちの目だ。視線だけで身ぐるみはがされそうな、無遠慮な濁つたその目を見るのは初めてじゃないが、何度も気分は悪くなる。

それでも腰の剣に手をかけて威嚇すると、大半は慌てたように視線を逸らす。小物だ。

俺が駆け引き（なんて言つほどのものじゃないが）をしている間にも、ルシアスはどんどん歩いていき、両脇の怪しげな店に挟まれて押しつぶされそうになつている、看板のない店の扉に手を掛け何度か来ていなければ表向きは普通の家に見えるだろう　勢いよく店内に足を踏み入れた。

「いらっしゃい」

恐ろしく無愛想な店主が、無機質な挨拶をくれる。しかも顔も怖い。こんな場所に立つてからつて、客商売としてどうなんだ、それは。

一方、相手が犯罪者だろうといいたいけな子供だらうと、自分を曲げるということを知らない我らが国王は満面の笑みで「はあーい、相変わらず素敵な仮面ね、ジョー」と手を振る。

店主はぴくりとも表情を変えない。まさに鉄壁の無表情だ。それどころか無言で「早く出て行け」と言わんばかりに睨んでくる。

俺はその理由を知っている。できれば知りたくないなかつたが。

唐突だが、ルシアスにある才能がある。

すばり賭け事で勝ち続ける才能だ。賭博から始まり、盤上ゲームや、騎士同士の決闘でどっちが勝つのか、明日の天気が晴れか雨か、などという些細な題目でも、賭けという言葉が絡んでこいつが外したことはない。勘がいいのか、運がいいのか。ルシアスにかかれれば歴戦の勝負師も赤子同然だ。

あまりにも勝ちすぎて、既にこの辺りの賭博場の半分ほどからは出入り禁止をくらつている。

ちなみにこの店も、店主の顔を見る限りそろそろ出入り禁止になりそうだ。俺が覚えている限りでも、相手の全財産を巻き上げるのは当然、その後は大体激怒した相手と乱闘になるか、哀れな身の上話に上手くいけば土下座がついてくる。

店にいた全員の財布を目の前に積み上げられた時は、流石の俺も開いた口が塞がらなかつた。

そんなわけで誰にとつても迷惑でしかないルシアスなのだが、昼間からこんなところに来ていることからもわかるとおり、自重しようという気持ちはこれっぽっちもない。

店主の熱視線もなんのその、鼻歌交じりに賭け事が行われているテーブルへ向かう。ルシアスの相手になつてくれるのは、まだ奴の存在を知らない初心者か、よほど自分の腕に自信がある強者のどつちかだ。どつちにしても心を折られるのは相手と相場が決まつてゐる。俺は虐殺シヨーなんて見たくない。というか、正直見飽きた。

カウンターに陣取つて、不機嫌な店主の面を眺めながらそれほど美味くもないつまみをつつく方がまだましつてもんだ。

「どうしてあれを止めないんだ」

座つた途端、待つてましたとばかりに店主が話しかけてくる。

「どうか、俺？俺が悪いのか？」

「……俺はあいつの保護者じゃな」

「違うのか」

「違う」

「じゃあ本物の保護者は何をしてるんだ
おっさん、何でそんなに保護者にこだわるんだよ。女装はあれと
しても、剣は馬鹿みたいに強いし、国王だし、とても保護が必要な
人間じゃないぞ、あいつは。」

店主は無表情なりに迷つてこいるような顔で、口を噤む。
決心がついたのは俺が皿のつまみを八割方、平らげてからのこと
だった。

「正直に言つが……あれは、少し頭がおかしいのではないかと思つ
んだが。医者に診てもらつた方がいいんじゃないか」

「……」

正直すぎるぞ、おっさん。しかしそくわかったな。いや、誰でも
わかるか。

よくぞ見破つた！あれ、この国で一番おかしい男だ！
と、言いたいところだが、迂闊なことを口にして後でヒーファ様
に処刑されるのだけは嫌なので、相手の出方を窺うためにも「どう
してそう思うんだ？」と質問してみる。こうすればこつちは喋らな
くてもいいからな！

だが喉を湿らせるつとグラスに口をつけた瞬間、店主は俺を嘲笑う
かのよつこいつ言つたのだ。

「いや、なに。以前にここに来た時、こいつ言つていたものだからな
自分はこの国の国王だと」

「ブツ……」

やべ、鼻に入った。

「何考てるんだ、おまえは……」

すぐさまルシアスを連れ出し あれだけの短時間で、既に相手は瀕死状態だつた。鮮やかすぎる 人目も憚らず大声をあげるが、当の本人はけろつとしている。

反省どじるか「もう少しで身包み剥がせたのに」とどじるの追剥のようなことをぼざく始末だ。

お前、国王だろ。哀れな一般市民のなけなしの給料取り上げて何がしたいんだよ。いや、この際それはどうでもいい。

「馬鹿だ馬鹿だと思つてたがここまで馬鹿だとは思つてなかつたぞ、馬鹿」

「四回も言わなくてもいいじゃなし」

「数えなくていい。まさかお前、外に出るたびに触れ回つてるんじゃないだろうな」

「そんなことしないわよ、面倒くさい」

「そういう問題じゃない。

「じゃあ何であのおっさんにはほいほい言つんだよー自分の立場わかつてんのか?」

「なあにヴォンツェル、まさか忘れたの?何を隠そう、私はこのバルトライヤ国の女お

「他に口外した相手はいないんだな?」

「いないわよ。ちょっと興味あつただけだし」「興味つて?」

「目の前の美女が、突然自分が国王だつて名乗つたらどんな反応をするのかなつて」

「……どんな反応だつたんだ?」

「そう、それよ!」

ルシアスは怒りの形相になる。

「あの中年、何て言つたと思う?『いくら見た目がいいからつて頭がそれじゃ結婚は厳しいぞ』ですつて……」

「はは、言われたな」

「お黙り」

ぎりり、と俺を睨む目つきが怖い。

珍しく本心から苛立つてゐるようで、それが少し意外だつた。

ルシアスは、行動も言動も大概ふざけていてまさに傍若無人を体現するような奴だ。が、その反面、感情の起伏はほとんどない。憤慨したり、悲しんだりしていても、それは全部「そういう振り」であつて、内心では何とも思つちゃいないのだ。

そうやって他人を揺さぶつて、振り回して、反応を観察している。例の「他人の困つた顔を見るのが好きなんだ」発言も、そういうところから出てるんだろうと俺は見ている。

だから、少しでも本氣で怒りを見せるルシアスは、俺にとつてはかなり珍しいものだつた。

「そんなに怒ることか？まさかそのなりで結婚したいわけじゃないだろ」「それはどうでもいいのよ。頭がおかしい扱いされたのが腹立たしいの」

……まさかお前、頭がおかしくないつもりでいたのか。

いや、それはないだろ？流石のこいつも、自分のやつてることがいかに馬鹿馬鹿しくて迷惑で脱力ものなのかぐらにはわかってる、はずだ。

それとも 本氣でわかつてなかつたのか？

まさか。まさか、な。

「なによ、その顔は」

内心が顔に出ていたのか、ルシアスは不機嫌そうに口を尖らせる。

「お前の考へてることはわかつてゐるわよ。でも私は本氣で言つてゐる。百歩譲つて、私のやつてることや言つてゐるしが常識から外れてるとしましょ？」

「百歩も譲るところなのかよ、そこ」

「お黙り……そり、だからといって、私の言つてることを理解しなくてもいい、理解できるはずなんてないって放棄されるのは腹が立つのよ。どうして頭がおかしいって決めつけるの？その根拠は？私

はずつと考えていてもわからないのと、どうしてお前たちほどの一言で何もかもわかつた気になつていいのよ？」

「何が言いたいのかわからん。あのおっさんがお前の言つことを信じたとしたら、お前が一番困るんじゃないか？ばらしたかったってことかよ」

ルシアスが珍しく眞面目に語つているのはわかつたが、これはこれで解読不能だ。専用の通訳が必要かもしれん。

「そういうことじゃ……」

歯切れが悪い。鬱陶しいくらいに意志がはつきりしてこないつてはしては珍しことだ。さつきから珍しことだらけだな。だからつて俺にとって全く希少価値はないし、嬉しくもないが。

「つまりね」

「……」

「お一人さん、会話がなくて焦つてるお見合い同士みたいだよ」耳元で息を吹きかけられながら言われて、俺は鳥肌が立つた。

咄嗟に抜剣しなかつたのを褒めてもらいたい。正直、「しなかつた」じゃなくて「できなかつた」なんだが。

ぎぎぎ、と首を回せば見覚えのある顔がそこにはあった。

「ハンバーート

「お久しぶり騎士のお兄さん。ここにいるを邪魔しちゃつたかな？」

「そんなわけあるか！」

「いいねえ、その些細な弄りにも全力で反応するヒル。嬉しくなつちやうなあ」

抑えろ、俺。

下手に何か言つたらここつと思つぱだ。

非常に認めたくなことだが、俺は剣も口もここつに勝てた試しがない。

「何でお前がここにいるのよ。叔母様を見張つてなさいって言つた

でしょ」「

一瞬でいつもどおりの調子を取り戻したルシアスが、責めるように言ひた。

「「めーん王様、ばれちやつた」

だらしない笑みを浮かべて、ハンバートはつと白状した。

お前、悪いと思つてないだろ。吹けば飛ぶような軽さだぞ。

ルシアスが顔を顰める。

「ちょっと、眞面目にやつてよね。何のためにお前を雇つてると思つてるのよ」

「そんなこと言つたつて、僕にもこりこり事情があるんだよ」

「お前の事情なんて知らないわよ」

「まあ聞いてよ。おばさんから伝言を預かってきたんだ」

「言つてみなせこ」

「ええと……『今すぐ帰つてこなければどうなるかわかるな?』『

「……」

「……」

「おい、帰ろ!」

「な、何おじけびいてるのよ、それでも騎士なの?」

「騎士だからこそ逆らつたらまずい相手はわかるんだよーお前は馬鹿だからわからんだろうけどな!」

「酷い! また馬鹿つて言つたわね!」

「そこしか聞いてないのか、お前はー」

「遊んでないで早く帰つた方がいいよ。なんか凄く怒つてたから

「そんなに?」

「最初はそこまでもなかつたんだけど、話してる最中にドレスがいっぱい届いて。あれ、頼んだの王様でしょ? 誰も何も聞いてなかつたみたいで、おばさんが『万死に値する』とか何とか呟いてたよ

「げ」

「そんなことしてたのかお前は…」

どうせあれだろ、あれ。『全員強制女装舞踏会』。こういう時だけ手配が早いんだからな。俺は当日、具合悪くなる予定だから関係ないけど。

しかめつ面で考え込んでいたルシアスは、渋々従うことに頷いた。こいつの場合、帰るのが嫌というより他人の言うことを聞くのが嫌なのだ。しかしここで駄々を捏ねた場合、後々生命の危機に陥るだろうことは火を見るより明らかだろう。

ルシアスは、酒場で巻き上げた金をハンバートに渡し、「いつものところに、いつもやつね」とだけ言って、さつさと踵を返した。わけがわからない俺はその後を追って、どういう意味か訊ねる。

返事はあっさり返ってきた。

「本当はこの後、兄上のお墓に行くつもりだったのよ。お花を持つてね。でも、叔母様をこれ以上待たせたら私がお墓に入ることになりそうだし。仕方ないからハンバートで我慢するわ」

「だつたら寄り道なんてしてないでさつさと行けばよかつただろ」

「あのねえ、私は庶民と違つて普段から財布を持ち歩く習慣はないの。いつもと違う動きをしたらルディに気づかれるでしょ。最近、勘が良くて困っちゃうわ。私の隠してたへそくりも没収されてたしどうだからつて兄上のところに雑草なんて持つていくわけにいかないじやない」

「相変わらず、兄上大好きだなお前。でも、なんでわざわざ俺まで連れ出したんだよ? 陛下のところに行く時、いつも一人で行つてるだろ?」

勿論、無断でな。

俺の指摘が堪えたわけではないだろうが、ルシアスは黙り込んだ。それ 자체は別に珍しいことじやない。都合の悪いことを聞かなかつたことにするのは奴の特技だ。

が、答えが返つてくるのを諦めるほど長々と沈黙した後に、まるで独り言のように呟いた「なんでもないわよ」という一言は全然なんでもなく聞こえなかつた。

王妃の独白1

最初に名乗つておきましょうか。

わたくしの名はソフィア・イン・ウイティア。バルトライヤに嫁いでからはソフィア・バルトライヤ、もしくはソフィア王妃と呼ばれておりました。

けれど王妃と呼ばれていたのも最早過去の話。息子が即位してからは王太后としてそれまでと変わらず、けれどそれまでよりも心穏やかに何不自由ない生活を謳歌していたわたくしですが、まさかその息子がわたくしより先に逝くとは思つてもみませんでした。

息子は、良い王だったと思います。

親の欲目と笑つてもらつても構いません。常に公明正大、有能で、慈悲と冷徹さを同居させた稀有な王だったと言い切るのに、なんの躊躇がありません。

わたくしには過ぎた息子でした。

だから神に愛されて、若くして天に召されたのでしょう。それにこんなわたくしが、同じく神に愛されたクリスティーネを死に追いやつたわたくしが母であることを、神は許されなかつたに違いありません。

少し、昔話をしましょう。

わたくしには弟がありました。わたくしより一つ下の、美しく、生まれながらに全てを手にした弟が。

全て、とは文字通りの意味です。

インウェイティア国王の長男として生まれた弟は、何もしなくともいずれ国王となる身分です。それに生来、利発で健康、容姿にも非常に恵まれておりましたし、愛想がよく人好きのする性格でしたから、両親はもとより、周囲の人間全てに愛されておりました。このわたくしを、除いては。

わたくしは、弟を愛することがどうしてもできませんでした。いえ、少しは愛していたのかもしれません。弟が華やかな笑みをわたしに向けるたび、舌足らずな口調で「姉上」と呼びかけてくるたび、本心から笑い返したことも確かにあつたのです。

けれどそれ以上に、わたくしは弟を憎んでおりました。

それは弟が何もかもに優れ、全てにおいてわたくしを超越した人間だったからに他ありません。

弟はおよそ完璧なほどに整った容貌をしておりました。わたくしとて醜かつたわけではありません。それでも女でありながら、異性である弟よりも明らかに劣つていたのです。わたくしは自分の顔を厭いました。

弟は著名な学者に賞賛されるほどに頭がよく、將軍に太鼓判を押されるほどに軍才に優れておりました。

わたくしが一を理解する間に、弟は十之二三か百も理解してしまうのです。それも、大した努力もせず、授業をすっぽかすこともあります。です。弟と接する時は目を輝かせる教師が、わたくしには何の期待もしていきことはすぐにわかりました。

弟は、何をしても人を引き付ける人間でした。

けして品行方正だったわけではありません。むしろ我慢で、口が悪く、やりたいと思ったことは多少の問題があつても我慢せずにやつてしまふ方でした。なのに、それで人に嫌われたり憎まれたりといつたことがなかつたのです。苦言を呈する者もおりましたが、最後には「あの方だから仕方ない」と楽しそうに笑うのです。

王女として、常に自分を戒め、それに相応しい行動をとろうと努めるわたくしの前では、誰もが丁寧ですが緊張していて、何より無関心でした。両親でさえ、弟がいる時にわたくしが口を開くと、つまらなそうな顔をしたもののです。

おわかりでしょうか。

わたくしの自尊心は、ずたずたでした。

弟に非があつたわけではありません。そもそも弟にとつては、わ

たくしなど眼中になかつたでしょ。殊更わたくしを貶めなくとも、誰もが弟を愛し肯定することは、死が等しく人間に訪れることと同じくらい絶対でした。

それゆえにわたくしはますます弟を憎み、劣等感と自己嫌悪で窒息しそうな少女時代を過ごしておりました。

転機が訪れたのは、わたくしが十八歳になった春のことでした。西の王国バルトライヤの王妃として、わたくしが選ばれたのです。表には出しませんでしたが、わたくしは狂喜しました。人生で初めて、弟ではなくわたくしが望まれたのです。それが政治的判断による妥協であったとしても、望まれたのがわたくし自身ではなくインウェイディア王女の肩書きであつたとしても、王妃として立つのはこのわたくしだけです。

バルトライヤ王妃として敬われ、将来の国王を生む権利はわたくしだけのもの。夫となる人が十一も年上で、女嫌いと噂されていることこの事実の前には瑣末なことでした。

程なくして、わたくしはバルトライヤに嫁ぎました。

出国する前、両親は涙ながらにわたくしとの別れを惜しんでくれました。弟は「虜められたら私が仕返ししてさしあげますよ、姉上」と子供のようなことを言っていました。けれどもわたくしの心は冷めていました。両親にも弟にも、特にこれといって酷いことをされたわけではなく、それでもわたくしの中に彼らへの愛情は欠片も存在しておりませんでした。身の内に巣食つた憎悪から解放されるとへの安堵があつただけです。

その証拠に、十年後に父がこの世を去つた時もわたくしは泣きませんでした。

……聞き苦しいことを言いました。

バルトライヤ国王は、見るからに軍人という印象の偉丈夫な方でした。女嫌いという噂は本当らしく、わたくしに対しても素つ気ない態度ではありました。もともと愛情など期待していなかつたわたくしにとつてはどうでもいいことでした。

結果的に、媚びることも縋ることもなかつたわたくしが扱いやすかつたのでしょう。王は、義務を果たすために必要な程度には、わたくしのもとに通つてきました。

それが仲睦まじい証に見えたのでしょうか、周囲の、特に王妃を巡る争いに負けた女性たちは、おそらく嫉妬からでしょうが、わたくしに王が女嫌いである理由を事細かに教えてくれました。

なんでも王の母君は不貞を働いたという噂が絶えない女性だったらしく、王も正統な世継ぎではないのではないか、玉座を継ぐ資格はないのではないか、と随分疑われたそうです。いえ、今も疑われているのでしょうか。

後で本人に訊ねたところ、「私は女嫌いではなく、人嫌いなのだ」と自嘲気味に言されました。

「母がどれほどだらしない人だったのか、私が一番よく知っている。だが、それを認めては私が惨めにすぎる。つまらない自尊心を捨てきれないから、のうのうと玉座に座っているのさ。たとえそれが別の意味で苦痛であつても」

思えばこの時、わたくしは王の心に触れていたのでしょうか。

自らの弱味を、弟から離れた今もわたくしを蝕む劣等感をさらけ出せていれば、何かが変わったのかもしません。けれどわたくしにはできませんでした。なぜかはわかりません。王を信用していかつた、矜持が邪魔をしたと言うのは簡単ですし、全くの間違いでもありませんが、おそらくわたくしの心は既に自分でさえ開けることができないほどに、重く錆びついていたのでしょうか。

それでも表面上は、穏やかに過ぎて行きました。

二年後にわたくしは王の子を産みました。世継ぎの子です。

王は、血筋のはつきりしない自分の子供を次代の王にしていいのか、迷つていたようですが、わたくしは嬉しかった。この子は、わたくしが命をかけてこの世に生みだした、唯一無二の生命です。子供の誕生は、こんなわたくしでもこの子のために生きることは許されるのではないか、という天啓にすら思えました。かつてなくわたく

くしの精神は安らかでした。初めて、自分のことを愛せたよつの気がするほどには。

その三年後です。

あの女が、クリスティーネが現れたのは。

クリスティーネ・アラベラは下級貴族の一人娘でした。貴族とは言つても、成功した商人の方がよほど裕福だったでしょう。そんな娘が王の主催する夜会に紛れ込めたのは、もつて生まれた美貌と運のおかげと言うしかありません。

明らかに周りから数段劣る衣装を身に纏ついても、クリスティーネの美しさは疑いようもないものでした。

わたくしは今でも、あの夜のクリスティーネをはつきりと思い出すことができます。

あの黄金のような髪も、白磁のような肌も、彫刻よりも柔らかく彫刻よりも完璧な容貌も、全てが息を呑むほど美しかつた。彼女こそ、およそ神が創り出せる最高の造形美を体現する人間でした。

されどわたくしが本当に戦慄したのは、その美しさに対してもはありません。

あまりに完璧で、あまりに美しいその容姿は王の目にも止まりました。王とて、女嫌いではありますが不能ではありません。御前にお召しになりました。この時は、おそらく素晴らしい芸術品に対する感嘆のような気持ちからだつたのでしょうか。

クリスティーネは、礼儀正しく控え目でした。これほどの容姿を持つていれば、これが王に取り入る好機であることはわかっていてもよさそうなものですが、傍目から見ても明らかにそんな素振りはありませんでした。

もつとも、それは逆に王にとつて好印象だったようですが。

短い言葉のやり取りの後、辞去を許され、クリスティーネはにこりと笑いました。

その笑みが、わたくしを戦慄させたのです。まるで子供のような、無邪気な笑みでした。周囲を圧倒するほどの中を待ちながら、それ

を利用することなど考えもしないような、ただ緊張から解放されたことが嬉しいといたげな…… そう、見ようによつては傲慢とも言えるかもしません。傲慢であり、純粋であり、それゆえ人を引く付ける。そういう笑い方でした。

もし、わたくしが自分の動搖にとらわれず、王がそれをどう受け止めたかに注意を払つていたら…… いえ、今更言つても仕方のないことです。

王は、クリスティーネをしばしば王宮に呼び寄せるようになります。

彼のことによく知るにつれ、わたくしはその邪気のなさ、欲のなさに驚かされたものです。捻くれたわたくしの目から見ても、クリスティーネは愛すべき少女に思えました。今でも、考えることがあります。あれは演技だったのだろうか、と。そしてその度にこう思うのです。演技などではなかつた、と。

クリスティーネは、眞実、純粋無垢な少女でした。

神に愛されし者は彼女のような者を指すのでしょうか。言葉にも態度にも嘘偽りはなく、それでいて他人を惹きつけてやまない魅力がありました。時として、特別な何かを持つて生まれる人間はいるものです。弟も、クリスティーネも、そういう人間でした。

王は、そういうクリスティーネに惚され、他の大多数の人間と同じように惹かれていたのでしょう。実際は王の一方通行だったのですが。なぜならクリスティーネには既に婚約者がいました。ラウルという、これも下級貴族で、幼馴染の関係だったそうです。彼女の話から察するに、クリスティーネの両親はこの結婚にあまり乗り気ではなかつたのでしょう。確かに彼女ほど美しければ、もつと身分の高い男性との結婚も夢ではありません。あわよくば上等な獲物を釣り上げて、ラウルとの婚約は破棄してしまえ。そんな思惑が透けて見えるようでした。

クリスティーネ本人は、ラウル以外は眼中になかつたようです。でなければ、王があそこまで思い詰めたはずがありません。少し

でもなびく素振りがあれば、ラウルなど王の敵ではないのですから。それをあのよろくな暴挙に出たといふことは、クリスティーネが王に全く興味を示さなかつたという証拠ではありませんか。

ある日、王はわたくしを私室にお呼びになりました。

そしてこう言つたのです。

「クリスティーネを私のものにした」と。

わたくしは咄嗟に言葉が出てきませんでした。何を言えというのでしょう。悲しめばいいのか、怒ればいいのか、正妻らしく余裕を見せればいいのか。おそらく最後の対応が王にとつて一番都合のいい対応だつたのでしょうか、実のところ何を感じたのか、もう覚えておりません。案外、何も感じていなかつたのかもしません。

王は、クリスティーネを愛している、とか何とか言つております。自分には彼女が必要だから、愛人として遇することを許して欲しい、とも。まあ、王なりに誠実だつたのでしょう。

数日後、わたくしはクリスティーネに事の次第を問いただしました。

可哀想に、彼女は憔悴しきつておりました。合意の上でなかつたのは、一目瞭然です。王の言葉を伝えると、真っ青になつて泣き出し、わたくしに縋りました。ラウルに顔向けできない、家に帰してほしい、と子供のように泣く姿は、この世のものとは思えぬ美しさでした。

その姿を見て、わたくしの胸にどんな感情が湧き上がつたか、想像できるでしようか。

かつてない憎しみです。

彼女が王を奪つたから、女として到底敵わない美貌を持つていたから、ではありません。それならばどれだけよかつたことか。わたくしが真に憎かつたのは、彼女の曇りのない清廉さでした。外見のみならず、内面にも歪みや後ろ暗いところなど一つもない、非の打ちどころのない彼女の存在そのものが、憎くてたまらなくなつたの

です。

それは、八つ当たりだったのかもしません。

先にお話したとおり、クリスティーネはわたくしの弟に極めて似ておりました。どこがどうということではなく、他者の愛や関心を自然に集めることができるという一点において、二人ともわたくしなど足元にも及ばない高みにいたのです。

弟もクリスティーネも、わたくしを見下したりなどしませんでした。彼らにとつては、当たり前のことなのです。わたくしが欲しくてたまらなかつた親愛も興味も、両手にあまるほど抱えて、その価値に気づこうともしない無邪気な生き物。周囲に守られた彼らの魂に実体があるとしたら、それはそれは美しく光り輝いていたことでしょう。

そう、わたくしはクリスティーネという人間に嫉妬していたのです。少女時代、弟に嫉妬したように。憎む理由すら与えてくれない、その理不尽なまでの善良さを、わたくしの醜悪な劣等感を甚振つてやまない、内なる光を憎悪しました。

全く心のこもらない慰めの言葉を吐きながらも、わたくしの心は煮えたぎつておりました。

それでいて酷く冷静でもあつたのです。

どうする当てがあつたわけでもありませんが、何をするにしてもクリスティーネの信頼を得ておく方がやりやすいと計算するだけの余裕はありました。

わたくしは言葉を尽くして、クリスティーネを丸めこみました。仮にも外国の宮廷で王妃として生きてきたわたくしと、田舎で平和に育つた小娘では役者が違います。貴女が言うことを聞かなければ両親やラウルが苦しむことになるかもしぬれ、と脅しつければ、もう何も返せません。

そうしてクリスティーネは、名実ともに王のものになりました。王は、わたくしがあまりにもあつさりと愛人の存在を認めたことを訝しんでいましたが、初恋の成就に舞い上がっていたのか、そも

そもそもわたくしの王への愛情を信じていなかつたのか、すぐに手に入れた宝に夢中になりました。

大変、結構なことです。

王が心からの愛を捧げれば捧げるほど、クリスティーネは不幸になるでしきう。

あの娘のことに関しては、王などよりわたくしの方が余程わかつてしました。純粹なだけに、自分の気持ちに嘘がつけないのです。あわよくば息子を国王にしてみせる、と野心でも抱く器用さがあれば、王も興ざめして解放したかもしれませんが、おそらくそんなことは考えもしなかつたでしきう。

そういう意味では、白痴と言つてもいいような娘でした。家臣たちは、わたくしが愛人に夫を盗まれた負け犬だと信じ切つていたようです。わたくしは気になりませんでした。進んで嫉妬するふりさえしたものでした。

恋人とは引き裂かれ、二十も年上の男に体を暴かれ、味方のない王宮で呼吸することが栄誉だと、言いたいならば言つていればいいのです。

誰がわからなくとも、わたくしだけはわかつておりました。この生活が、クリスティーネの精神を痛めつけ、傷だらけにしていくものに他ならないことは。

全て承知の上で、彼女を王に投げ与えたのです。

わたくしのように惨めな思いをすればいい。わたくしのところまで落ちればいい。誰もがお前を愛するわけではないと、思い知ればいい。

そんなおぞましい欲望を、クリスティーネはそれなりに満たしてくれました。

けれど終わりは突然にやつてきました。

クリスティーネが、妊娠したのです。

クリスティーネの妊娠は典医の口から知られました。

彼によると、母体は極めて精神不安定であり体も丈夫ではないため、出産は困難なものになるかも知れないといつことでした。

わたくしは考えました。

放つておいても、クリスティーネは死ぬかもしません。 それならそれで結構なことです。

では、死ななかつたら?

今は生きる屍のような生活を送っていても、子供が産まれたら気力を取り戻すかもしません。自分の経験から言つても、我が子は可愛いものです。父親がどうであるうとも。

そんなことは許せるものではありません。

生まれてくるのが男児であればわたくしの息子を養かす可能性もありましたが、そのことは思いつきませんでした。ただただクリスティーネを幸福にしたくない、救いを与えたくないといつことだけで、わたくしの頭は一杯でした。

都合のいいことに、クリスティーネは出産を王室で迎えたくないと言いました。

それはそうでしょう。ただでさえ、好きでもない男と毎日のように顔を合わせなければならない上に、周囲から好奇と軽蔑の目で見られていれば、気の休まる時もないはずです。

わたくしはそれにつけこんで、実家にクリスティーネを送り返しました。

王には、出産を心おきなく待つには実家の方がいいでしょ」と言つておきました。

家臣たちは、それが目障りな女を追い払うための口実だと思ったようですが。

そして忘れもしません、あの冬がやって来たのです。

そろそろ子供が生まれるだろつと予想していたわたくしは、典医を呼びつけて、クリスティーネのところに行くよつこと申しつけました。

当然のことながら、すこやかな子供を期待してのことではあります。

わたくしは、クリスティーネを殺すよつに 勿論、こんな直接的な言い方ではありませんでしたが 「要請」しました。

典医は恐慌をきました。

自分は人を助けるのが仕事だ、王妃の命令だろうと聞けることと聞けないことがある、と威勢だけはよかつたものです。わたくしは鼻で笑いました。立派なことを言つてはいても、この男はわたくしと同類だとわかつていてからです。

「イネル・ヴォーンを覚えていて？」

わたくしの言葉に、典医は青褪めました。

その名は、彼と王宮典医の座を争つた医師の名前でした。患者を不手際で死なせてしまい、王宮典医はおろか医師としての信用も失つて、失意のうちに逝去した、今では誰も覚えていない名前です。彼の弟子を見つけることができなければ、わたくしとて真実を知ることはなかつたでしょつ。

「お前は彼の患者を殺すように、弟子に頼んだそうね。死ななくてもいい患者を殺し、罪のない同僚を蹴落とし、お前がのうのうと名譽と財を手に入れたことはわかつています。人を助けるのが仕事だ、なんてどの口が言つのやら。医師の心を捨ててもその椅子が欲しかつたのでしょう。守りたいのでしょつ。ならばどつすればいいのかはわかるはずです」

典医はいともたやすく屈しました。

所詮、典医は典医であり、クリスティーネのような清廉さなど期待するべき存在ではないのです。

わたくしはさりげなく、王が典医をクリスティーネの実家へ遣わ

すように仕向けました。表面に出していくとも、王が愛しい女の大事に気を揉んでいたことぐらい察しておりましたから、それはすんなり決まりました。

その後は、何もかも上手くいきました。

典医はわたくしの命に背くことなく、肃々とことを実行したようです。

本当に、人の命とは呆氣なく摘み取られるものです。それも、本來ならばそれを助ける者の手によつて。あれ以来、わたくしは医師というものを信用しておりません。

王は一気に老けこんだようでした。

もともとそれほど若くはなかつたのです。精神的な打撃が、肉体の老化を早めてしまつたのでしょう。葬儀は、派手ではありませんが王の想いの深さを感じさせるものでした。クリスティーネの遺体の入つた棺を王がどんな想いで見つめていたのか、わたくしが知つたのは葬儀から一月ほど経つてからのことでした。

「お前がやつたのか」

唐突にわたくしの部屋にお渡りになつた王は、こちらを見もせずにそう言いました。

あまりにもさりげなく言われたので、一瞬、聞き流してしまいますになつたほどです。怒りも悲しみも、その言葉には込められていました。おそらく、わたくしの答えなど聞くまでもなく、真相を察していたのでしょう。ならばどうしてそんな質問をしたのか、王の心を推し量ることはできませんでしたが。

わたくしは平然と答えました。

王のご想像どおりです、と。

わたくしの行為が表沙汰になれば断罪は免れなかつたでしょうが、それならそれでどうにでもすればいい、と思っておりました。自分の罪が、同情されるような理由から行われたものでないことは、よくわかつていました。わかつても止められなかつたのです。そして、ことここに至つても、後悔は少しも感じませんでした。何も

感じていない人間に、どのような罰も無意味です。ですからわたくしは、王の反応など気にせずに言つたのです。聞くまでもないことでしよう、と。

王はそこで初めて、わたくしを見ました。

「何故だ」

「何故とは、不思議なことを。夫を奪つた女が憎いのに、貴賤が関係ありますようか」

「お前は私を愛していない」

正直、この返答には驚きました。けれど考えてみれば、王は愚かではありません。クリスティーネへの執着は人並みはずれたものがありました。それ以外では冷静で捻くれた物言いが目立つ方でした。

わたくしは微笑しました。

男女の愛ではありませんが、同士としての連帯感ならば抱いていたのです。王にもわたくしにも、自分でもどうにもできない歪みがありました。ある意味で似たもの同士というのでしょうか。それをこの時、確信したのです。

ですから、正直に答えました。

「貴方が惹かれた部分が、わたくしにとっては憎しみの対象だった、それだけのことです　　それに、貴方のことも」

「私が？」

「貴方だけが救われるには許せなかつた。貴方を救うのが、クリスティーネだなんて許せなかつた。そういう愚かでつまらない人間なのです、わたくしは」

王は、長い間、沈黙していました。

クリスティーネを葬つたわたくしを憎む気持ちは、勿論あつたでしょう。一方で、わたくしが王に対して連帯感を抱いていたように、王もこの時、わたくしに対して哀れみを感じていたに違ひありません。でなければ、いくら公にすることが叶わないからといって、一言の罵倒もなかつたことに説明がつきません。

あるいは何を言つても無駄と諦めていたのでしょうか。クリスティーネが死んだことは、王ですら覆せない事実だったのですから。いざれにしても、王はわたくしをいかなる形でも罰しませんでした。

ただ黙つて扉を開け　この扉が、その前から少しばかり開いていたのをわたくしは今でも覚えています。つまらないことほどよく覚えているものです　出て行きました。

そして終生、一度と入つてくることはなかつたのです。

これが、わたくしの昔話の顛末です。

あれから十九年が経ちました。王が逝き、息子が即位したのが五年前です。たつた五年である子が死んでしまうなんて、戴冠式の堂々とした姿からは想像もできませんでした。幼いころは多少、内気なところがあつたものの、成長するにつれて誰に恥じることもない、心身ともに立派な青年になつたあの子は、わたくしの全てでした。だからあの子があつさりと神に召された時、これは罰なのだと、どこかで納得したものです。

クリスティーネをあのように貶めたわたくしに、あの子の親である資格はないと、全能なる何かに突きつけられたような気がしたのです。

息子が死んだ後、王を継いだのはクリスティーネの息子でした。クリスティーネに生き写しの、神々しい美貌を持つ若者です。クリスティーネの持ち得なかつた権力すら手に入れ、まさに並ぶものなき至高の存在と言えるでしょうが、わたくしはもう憎悪を感じはしませんでした。

理由は二つあります。

一つには、他ならぬ息子が彼を非常に愛していたからです。彼の方も、息子を慕つてゐるよう見えました。であれば、その気持ち

だけはわたくしと同じものであるはずです。息子が愛していた相手を、息子を愛していた相手を、息子を愛していました。息子が愛していました。

そしてもう一つには、あの青年がクリスティーネに酷似しているからも、内面的には全く似ていなかつたからです。

おそらくクリスティーネの両親は、娘の忘れ形見を持て余したが、自分たちから栄達の機会を奪つた疎ましい対象として見たかしたのでしょう。出産で弱つたせいで落命したのだと、典医は説明したはずです。残された赤子を憎むとまではいかなくとも、厄介な存在と認識したかもしません。

事実、わたくしの目に映る彼は、クリスティーネというよりも王やわたくしと同じ種類の人間に見えました。

王弟時代、彼の奔放な振る舞いは時に宮廷で問題になりましたが、わたくしに言わせればあれは一種の病気です。

悪戯心などという可愛いものではなく、単にそれをすることによつて周りを試していたにすぎません。傍目にはそう見えなくとも、彼は頭のいい少年でした。反抗したり媚びるよりも効果的に敵味方を判別する方法を、知つていたのです。息子が、一貫して彼を庇い続けていたのも、そのことを察していたからでしょう。

わたくしが自分の観察眼を確かなものと信じたのは、先日、彼と二人きりで話す機会を設けた時のことです。

会見を申し込んできたのは、彼の方でした。

彼は、いつものように微かな笑みを口元に湛え、大股に部屋に入つてきました。そして椅子に優雅に腰掛けると、こう言ったのです。貴女が私の母を殺したそうですね。

「誰に聞いたのです」

「誰だと思いますか

「ふざけないでちょうどいい」

「ふざけていいつもりはありませんけどね 兄上ですよ」

心臓が止まるかと思いました。まさかそんな、という思いと、あるいは知つていたかもしれない、という思い、その双方がぶつかり

合って、結局まともな思考など何一つ浮かんではきませんでした。彼が虚言を吐いている、という考え方一瞬、脳裏をよぎりましたが、息子の死からまもないのにこんな嘘をつくとも思えませんでした。誰を裏切ろうと、彼は息子のことだけは裏切らないでしょ。

わたくしは観念しました。

「ええ、そのとおりね……それで、どうしたいのです。わたくしを裁きたいのですか。貴方ならできるでしょ？」

「裁判、という意味なら、そんなことはしません。貴女は兄上の母親ですからね。不名誉を背負わせるのは忍びないし、兄上も望んではいない」

「では、何が目的ですか。貴方はわたくしを恨んでいるでしょう。だからわざわざ、こんな場を設けたのでしょうか？」

「恨んでいる、といつよりも……想像することができます。貴女が母を殺さなかつたら……母が生きていたら、俺が得られたかもしれないものについて」

「何が言いたいのです？」

「別に。大体、私が貴女を恨んでいて罵詈雑言の限りを呴くして罵つたとしても、貴女のやつたことがなかつたことになるわけじゃない。少なくとも、私の中では。そもそも私は貴女を許すつもりはないし、貴女だつて私の許しなんて求めるつもりはないでしょ？」

「……」

「貴女にとつての罰は、兄上が貴女の罪を私に告白した、そのことで十分では？」

「そのとおりです。」

わたくしは息子の前でだけは、綺麗な人間でいたいと思つておりました。それが身勝手な望みだとはわかつていましたが、息子を見る時だけは、本当にわたくしの心中には温かく優しい感情だけがありました。だから知られたくなかつた。わたくしがいかに醜く愚かな人間なのか、知られたくはなかつたのです。

けれどこれが罰と言うなら、わたくしは受け取らなければならな

いのでしょうか。

滑稽なものです。

息子は死に、他ならぬクリスティーネの息子が全てを手に入れている。わたくし「」とときに変えられるものなど、何も無いといふことでしょうか。分を弁えず、神の寵愛を受けし者を妬んだ報いが、これなのでしょうか。

かつてない疲労感に襲われるわたくしを、彼は黙つて眺めていました。

時間にすれば、一、三分でしょうか。その間に何を思い、何を考えたのか、わたくしには見当もつきません。何故あんなことを言つ出したのかも、きっと永遠にわかることはないのでしょう。

「そんなに落ち込むことはありませんよ」

沈黙の後、彼は不気味なほど穏やかにそう言いました。
わたくしは顔を上げました。その穏やかさに内包された何かを感じ取つたのです。

彼は一見、くつろいだ様子でした。無邪氣とさえ言えそうな微笑を湛えて、けれど注意深い者ならば苛立つてゐるのがわかつたでしょう。

彼は椅子から立ち上がり、わたくしを見下ろして、言い聞かせるように、こう言いました。

「貴女が思つてゐるほど、兄上は打撃を受けていないかもしませんよ。兄上だつて、そこまで澄み切つた人間じやありませんからね」

今度こそ、わたくしは絶句しました。

息子をあれだけ慕つていた彼が、こんなことを口にするとは思つてもみなかつたのです。王位継承権とて、捨てようとしたのをわたくしは知つています。寵愛を得るために媚びてゐたようには、見えませんでした。内容そのものより、忌々しげなその口調が感情の激しさを表しているようで、余計に混乱を誘われました。彼は行動はともかく、感情の起伏は極めて平坦な人間だと思つていただけに、どうとらえるべきかを測りかねたのです。

「貴方が……貴方が、そんなことを言つのですか。息子をあれだけ敬愛していた貴方が、どうしてそんなことを」

「理由を教える義務があるとでも?」

わたくしの精一杯の言葉を、彼は見事に切つて捨てました。

「貴女は考えるべきです。貴女が兄上の何を見ていたか、何を見ていなかつたか 知らなくても、いいことなのかもしませんけどね」

彼の言つことは、わたくしには何一つ理解できませんでした。訊ねようにも彼はさつさと背を向け、出て行つてしまつたのですから。その拒絕を覆すことは、わたくしには無理でした。

それから何度もあの言葉の意味を考えましたが、思い当たることは何もありませんでした。

息子は本当に優しい人間で、彼が突然あのよつに言つ出す理由など一つもないように思えるのです。けれども彼はわたくしに答えを教えるつもりはないでしょう。考える、と言つていました。彼は、わたくしを試しているのです。答えに辿りつけるか、否か。それが彼にとつてどんな意味を持つのかはわかりませんが。

でも、わたくしは怖いのです。

わたくしの知らない息子を知ることが、とても恐ろしい。

自分のように惨めでつまらない人間だつたら、どうすればいいのでしょう。息子はわたくしの誇りでした。わたくしのような人間からは所詮わたくしのような人間しか生まれないのだと、そう突きつけられて受け入れる自信などありません。

考えたくない。

もう何も、考えたくないのです。

彼と彼女の問答

「やあ、こんなにちは
「……」
「あれ？ 黙つちゃつてどうしたの？」
「……」
「もしかして機嫌悪い？ 生理？」
「お母様から聞きました。貴方が少女を偏愛する変態であるとは本当ですか？」
「酷い言われようだなあ。あんまりはつきり言わないでよ。まあ、本当のことだけどね」
「どういう気持ちなんですか？」
「どういうつて？」
「貴方の性癖はおそらく小数派であると理解していますが、それについての貴方の考え方、もしくは感情に興味があります」
「面白いこと言つねえ、君。なんだつてそんなことに興味があるわけ？」
「なぜ？ さあ、わかりません。強いて言えば、性格でしょうか。私は好奇心が強いので」
「ふうん？」
「自分にとつて未知のことは、知つてみたいものではありませんか？ 自分が身をもつて体験することは出来なくとも、人の体験を聞くことで核心に迫ることはできると思います」
「それを知つて、君はどうしたいの？」
「どうもしません。ただ知りたいだけです。貴方の性癖を大っぴらに話したりはしないので安心してください」
「別に僕は構わないけどね。同じ趣味の人以外で僕に興味を持つ人がいるなんて思わなかつたから、新鮮だよ」
「そつなんですか？ 寂しい人生ですね」

「君、可愛い顔して結構きついね。もつとまあ、柔らかく遠まわしに言つてくれないかな。貴族なんじょ？」

「必要があればそうしますが、貴方はそういう物言いを好まない気がしたので。それに、お母様はああいう方ですから、私も勿体ぶつた言い方は苦手です」

「ああ、あのおばさん。の人もなかなか面白い人だつたよ。流石は君の母親だ」

「……」

「どうかした？」

「いえ。ただお母様を『おばさん』呼びわりして五体満足でいらっしゃるとは思わなかつたので」

「はは。僕、悪運だけは強いからね。でも、君に手を出したら見逃してはもらえないだろうなあ」

「そうですね。四肢切断の上に猛獸の群れに投げ込むくらいのことはすると思います」

「……それは僕に対する牽制で言つてるの？」

「?私は客観的に考えた上で、最もありうる答えを導き出しただけです」

「そ、そりなんだ」

「私は一人娘なので、本来分散されるべき愛情や保護意欲が集中してしまつていてるのでしきう。お父様も、私と言葉を交わした異性の方を全員把握しているふしがあります」

「ふうん。だから君も変なんだね」

「そりかもしれません」

「あ、肯定するんだ…」

「私は、自分自身がおかしいと思つことはしていなつもりですが、それが他の方から見てもおかしくないとまでは言えません」

「なんか真面目だね、君。他人からどう見えるかなって、どうだつていいじゃないか」

「やはりそういう心構えでないと、自らの信念を貫き通すことはで

きないのですか？」

「信念つて言うか、僕の場合はただの趣味だけ。まあ、変態が何を言おうと常識には勝てないからね。眞面目に向か合つても馬鹿見るよ。」

「そうでしょうか？ いえ、貴方の言つことを否定する気はありません。でも興味深いですね……そういう特殊な性癖を持っていたからその結論に至つたのか、そう言に切るような思考回路の持ち主だけが自身の特殊な性癖を受け入れられるのか」

「君の言つことは難しすぎてわからないよ」

「では質問を変えます。自分の性癖を自覚したのはいつですか？」

「そうだねえ、十五、六歳の頃かな？」

「早いですね。今の私と同じくらいですか？」

「僕、好きな子がいたんだよねえ。ドロレスっていう、可愛い子。まあ、身分違いで恋人どころか碌に口も利けなかつたんだけど。だから未だにドロレスを探してゐるのかな……と言つても、女の子と戯れてる時に彼女のことなんて考えないけどね。正直、顔もよく覚えてないし。そう考へると、ドロレスのことは全然関係なくて、ただ単に僕がそういう人間なだけかもしれない」

「そうですか」

「そうですかって……僕さあ、今かなり個人的な話したなんだけ？ 一言で終わらせられちゃ、僕の立場ないんだけど」

「貴方が言つたんですよ。どうして成人した女性では駄目なのかわからないと。本人がわからないことを私が、まして箱入りの私がわかるわけがありません」

「あ、言つちやう。自分で言つちやう。わからないなら考えればいいじゃん。別にどうしてもわかつて欲しいってわけじゃないけどさ、わざわざ僕とこうして話してゐることは、理解したいって気持ちが少しあるんでしょ？ すぐに正解が欲しいなら、本でも読んでればいいんじゃない？ 僕は嫌いだけど」

「……そうですね。貴方の言うことにも一理あります」

「君、ほんとに素直だね。悪い人に騙されないか心配だよ。ま、何があつてもあのおばさんが全部粉碎しそうだけど」

「母は、やはり特殊なのでしょうか」

「……逆に訊きたいんだけど、君はあれを普通だと思うの?」

「よくわかりません。物心ついた頃から、極限状態での生き残り方とか人間の急所とか、そういうことばかり教えられていましたから。見本を見せるために訓練場まで連れていかれたこともあります」

「うわあ……」

「最近になつて他の家のことを見るにつれて、もつとやらなければいけないことがあるのではないかとも思うのですが……そのことをお母様に言つたら『よそはよそ、うちはうちだ』と一言で片づけられてしまつて」

「凄いねえ。お父さんは何も言わないの?」

「父も軍人なので。元は画家志望だったんですけど、隣国の著名な美術学校に落ちて夢を断たれたことが悔しくて軍人になつたそうです。いつか併合してやるとか言つてました。あわよくば私にその志を継がせたいようですね」

「君はその気あるの?」

「まさか。私は学者になりたいんです。ただ、軍人ならともかく学者なんてお母様が許さないかもしませんが」

「必要なら僕が弱味の一つ二つ探ろうか?」

「そんなことが出来るんですか?」

「それが僕の仕事だからね。あのおばさんじゃ大した汚点は出でこないかも知れないけど、ないならいで作ればいいし。僕は嘘つくのも得意だからね」

「……今はいいです」

「そう? 遠慮しなくてもいいよ?」

「お母様が認めざるを得ないくらい、私が優秀な成績を出せばいいだけのことです。それに、人に頼らなければ学者になれないなんて認めたくありません」

「へーえ、言うねえ。精々頑張つて
「ありがとうございます」

「……」

「貴方はどうしてその仕事をしているんですか?」「
「僕? たまたまかな。僕を一番田に拾った奴が、そういう仕事を僕
に仕込んだんだよ」

「一番田?」

「そう、一番田。僕、孤児だつたんだ。最初の奴はかなりの変態で、
まあ今の僕が言えたことじゃないけど、小さい男の子が好きだつた
みたいだよ。毎晩毎晩、僕のこと膝に乗せて絵本広げて、可愛いね
可愛いね つていろいろするわけ。子供心にも死んでくれないか
なつて思つてたらほんとに死んじゃつた。だから一番田」

「……」

「どうしたの?」

「そんなことを私に話しても平気なんですか?」

「あんな奴に、僕の何かを少しでも変えられたなんて思いたくない
からね。実際はどうか知らないけどさ。それに、今の仕事で僕はある
意味復讐してるからいいんだよ」

「復讐?」

「さつき言つたじやん。人の秘密を探つたりでつち上げたり、そう
いうのが僕の仕事だつて。表では虫も殺せませんつて顔してる奴が、
裏ではえげつないなんてよくあることだよ。そういう連中の澄まし
た仮面を剥いでやるのがたまらなく楽しいんだよねえ」

「それと復讐とどういう関係が?」

「僕に悪戯した男も、社会的には模範的な人間だつたんだよ。孤児
の僕なんかを引き取つて育ててやつてる人格者、つて近所の人には
評判だつた。だから僕は、あいつみたいに金も地位もある善人を見
ると無性に苛々する。裏の裏まで調べつくしてやらないと、気が済
まない。そうやって手に入れた秘密を有効活用するのは、僕じやな
くて雇い主だけど、でも『知つてている』つて気分いいじやん。その

「気になりさえすれば、連中の何もかもを僕が潰せるつてこいつのせさ」

「……そりですか」

「心配しなくとも、君や君の家族に何かする気はないよ。今はね」

「今は？」

「ああ、言葉のあやだよ。僕は一応、この国の王様に雇われているわけだし、王様に頼まれたならともかく、何もないのにけつかい出してあのおばさんに恨まれるのは割に合わない。それにあのおばさんも君も、別に善人じゃないしね」

「そんなこと言われても、嬉しくありません」

「だろうね。褒めてるわけじゃないし」

「……」

「怒った？」

「楽しそうに訊かないでください」

「頬が赤くなってる。そういう顔をされるとしゃべりやがりうよね」

「つ触らないで、ください」

「」の程度でそんなにびくびくしなくていいでしょ。流石お嬢様

「……帰ります」

「あれ、帰るんだ？」じゃあ、王様の秘密を教えてあげるよって言つたら、どうする？」

「どうもしません。貴方が知つてこることが事実だとしても、それが真実だとは限りませんから」

「口の達者な子だね。わかつたよ。帰れば？また気が向いたら来てよ

「おかしなことをしないと約束してくれますか？」

「どうだらうねえ」

「……」

「とにかく、まだ聞いてなかつたね。君、名前は？」

「アンゲリカ。アンゲリカ・フォン・ベルハウゼンです」

「アンゲリカ？ということは、愛称はゲリかな。僕はヴラジミール・ハンバート。偽名だけね」これからよろしく、ゲリ」

私、ダイアナ・アウスターは人生で最も重大なイベントを迎えるとしている。

何を隠そう、結婚するのだ。

お相手はそこそこ大きくてそこそこ発展している国バルトライヤの、今をときめく国王とか。まあ、悪い話ではない。父上や爺やが口を揃えて褒めちぎっていたのは当然としても、風聞から判断しても国王はそれなりに有能らしいし、バルトライヤとの関係を強化しておくにこしたことはない。飛びつくべきお話だ。しかも申し出できたのはあちらの方から、らしい。

物好きな連中もいたものだ。

私の噂を知らないわけもないだろ? 知つていたら知つていたで、なぜ私をご指名なのか興味深いところなのだが。

「聞いているのですか、姫様!!」

上の空になつていたのを気づかれたのか、爺やが凄まじい形相で雷を落とす。

私は適当に頷いておいた。本当は耳を塞いで退散したいが、生憎と馬車に閉じ込められている現在の状況下では無理な相談だ。まったく、私の見合いになぜ爺やがついてくるのか。先日、私よりも孫娘を結婚させてやれと言つた時は何か感動していくくせに、結局ついてきた。これはきっと父上の大きいなる意志が関係しているに違いない。揃いも揃つて、説教が長い所と同じ話を何度も繰り返す所はそつくりだ。現に、今も目の前で三度目か四度目かわからないバルトライヤ国王礼賛が続いている。

曰く、容姿端麗、頭脳明晰、文武両道、博学多才と、一体どこの超人かと言いたくなるほどの褒めつぶりだ。

「お前が結婚すればいいんじゃないか?」

「何を仰います！」

つい口に出してしまつたせいで噛みつかれる。本当に噛みつかれた方がましだ、と思い、爺やが私に狂犬よろしく噛みついてくる図を想像したら笑つてしまつた。

「笑つておられる場合ではありませんぞ！何としてでもこの話をものにしなければ、姫様の明日はありません」

「何？私はお先真つ暗なのか？」

「何を驚いているのですか！よいですか、殿下はもうすぐ二十一歳。これは王族としては売れ残りもいいところですぞ！修道院行きも考えねばならないかもしません。それでもいいのですか！？」

「よくはないなあ、うん」

「そうでしようとも！殿下のように飽きっぽくて我儘な方が、あの生活に耐えられるとは思えませんからな！むしろ修道院の方が迷惑です」

「お前、それは酷くないか？」

「酷いものですか。陛下も言つていましたぞ。あのじゃじゃ馬を押しつけられる国はとんだ災難だ、と」

押しつけようとしている張本人が、よく言つ。

じゃじゃ馬と言われようと私の心にさざ波ひとつ立つことはないが、それが相手の耳に入つたら婚約は即取り消しになるだろう。世の殿方はおしとやかで従順な女性を好むものだ。現に、最初の婚約が相手の病死で壊れて以来、私と一生を共にしようとした申し出でくる王族はほとんどない。

確かに、趣味が狩りと乗馬、おまけに見合いの場に男装で臨んだりしたら遠慮されても無理はないが、夫となる相手に素の私を知つてもらおうと考えてのことだ。私はそれほど器用な方ではないし、その場だけ取り繕つて結婚したとしても破綻するのは目に見えている。

大体、性格や嗜好も知らない他国の女をほいほい懐に入れることに、不安を抱かないのだろうか？

まあ、その辺りは私が口を出すことではないが 私の恰好を見ても可笑しそうに笑つてくれたのは、一人だけだつたわけだし。

「どんな方なんだろうな…」

バルトライヤ国王は、と続けようとした私の咳きは、爺やの喚き声に遮られた。今までの熱弁を全く聞いていなかつたことがばれたらしい。

そして再び繰り返される長つたらしに説教は、目的地に到着するまで私を辟易させるのだった。

そんなわけで、バルトライヤに着く頃には私は疲労困憊だつた。王宮の入り口まで出迎えに現れたのはいかにも切れ者といった印象の細長い男で、肩書きは宰相補佐であるらしい。宰相が病床にあるとかで、非礼を詫びる生真面目な様子は爺やと似たものを感じさせた。もしこの国に嫁いだら、こついう男が爺やのよつて口ひりひりくなるのかと思うと憂鬱だが、それは脇に置いておく。

「お気になさらず。お身体を大事にと、伝えておいてもらえますか？」

できるだけ、深窓の姫君っぽく見えるよつて振る舞つてみる。

見たが、爺や。私だつて猫ぐらい被れる。

「……して、国王陛下はどういらに？」

私を華麗に無視した爺やの興味は、噂でしか知らない若き国王にあるらしい。

なぜかその問いに宰相補佐 フレイザー卿は、顔を引き攣らせた。

「へ、陛下は少々政務が立て込んでおりまして……申し訳ありませんが、先にお部屋の方にご案内を

「よつこそこらつしゃいーー！」

フレイザー卿を遮るように、誰かが勢いよく抱きついてきた。

その人物に私は不覚にも見惚れてしまった。一言で表現するならば、そう、「きらきらした人」とでも言えればいいだろうか。驚くほどに美しい女性だった。目鼻立ちがはつきりしている割にぐどくない顔立ちに、金髪が生き物のように波打っているかの人は、神話の世界の住人にも思えた。

つい「負けたな…」と呟く私に、彼女はきょとんとした後、得意気に高笑いした。

「ほほほ、私の美貌はアウスターの姫君さえも魅了してしまうのね。罪な女だわ」

「あの、貴女は一体」

「あら、御免なさい。私はこの国の王です。ルシアと呼んで頂戴」

「は？」

「バルトライヤ国王は男性の筈では？」

私の疑問を爺やが代わりに口にする。自称バルトライヤ国王は、うつとりするような微笑を浮かべて私の手を握り締めた。

「確かに私の生まれた時の性は男だけれど、それで美しく着飾ることを諦めるべきではないわ。性別とは個人を引き立てる素養であつて、個性を殺すものであつてはならないと思うの。姫君もそう思わなくて？」

微笑んではいるが、やけに目が真剣だ。そんなにこの問いは彼女、いや彼にとつて重要なものなのだろうか？とはいえ彼の言つことは私の考えと通じるものがあつたので、私はしつかりと頷く。

「そのとおりですね。性別を理由にして、趣味をやめさせようとする権利など誰にもないと思います」

「あら、貴女も苦労したのね。噂は聞いているわ。アウスターの姫君は男の恰好を好む変わり者だつて」

「貴方こそ、そこまで女装を極めている時点では相当変人では？でも凄いですね。私の国には貴方がそんな趣味をお持ちだなんて噂は全く聞こえてこなかつたのに」

「私は何も隠しているつもりはないのだけれどね」

「そのお陰で臣下は苦労します」

苦虫を噛み潰したように言つたのはフレイザー卿だつた。なぜか隣で爺やが深く頷いている。何を通じ合つているんだ、お前たち。

「まあ、意気投合されたのはいいことです。陛下、ダイアナ殿下を部屋まで」案内して差し上げて下さい。私はこの方といろいろとお話ししなければならないので

と言つて、爺やを見やる。

「別に構わなくつてよ。そうだ、疲れていなければ庭園まで」一緒にしない? 珍しい花が見られるわ

「喜んで」

私は素直な笑顔を返した。

普通、とはいがたい恰好ながらやけに堂々としているこの人を見ていると、何だか楽しくなつてきたのだ。

庭園は本当に素晴らしい。

ありとあらゆる花が豪快に、けれど華麗に咲き誇る様は壯觀の一言だつた。思わず歓声を上げた私に、陛下はとても嬉しそうな顔をした。笑つてはいなかつたけれど、そんな気がしたのだ。

「兄上がとても花の好きな方だつたから、今でもまめに手入れをさせていいるの」

「先代にはお会いしたことがあります」

「兄上に?」

「ええ。私が十四の時に、一度だけ。何を隠そう、婚約者候補として

「婚約? 兄上と、貴女が?」

意外そうな顔だ。確かに、あの時の私は今に輪をかけて落ち着きもなく、とても誰かの伴侶となれる人間ではなかつた。無理やり飾り立てられ、服に着られたようになつて不機嫌だつた私と、対等に

話してくれたことを覚えている。子供扱いされたことが面白くなかった私にとって、その反応は新鮮だった。弓矢で獲物を狙っている時の緊張感が好きだとか、文物の衣装は動きづらくて嫌いだとか言つても、眉を顰めたりお説教しないのが嬉しかった。

「『君はこれからもつと綺麗になつていくだろうから、羨ましい』と言われました。『その頃には私はおじさんだ』って」

おじさんじやない！と私は癪癪をおこしたのだ。おじさんでも結婚するもん！と。

一年後に彼が病死しなければ、本当に式を挙げていただろう。私が子供を産める体になるまでは婚約者という関係に留まつてたが、少なくとも父上は乗り気だつた。

彼が亡くなつた時はとても落ち込んだ。そして誓つたのだ。彼のような人でなければ結婚しない、と。

「じゃあ貴女がお見合いを何度もぶち壊しているのは、兄上のせいなの？」

「せ、い、つ、て…。まあ、そうです。私は理想が高いのですよ、陛下」

「そのようね」

「貴方はどうなんですか？」

「どうつて？」

「どうして女装なんてしているんですか？」

陛下は意表を突かれたようだつた。初めてされる質問とも思えなが。

「……あら、言つまでもないことよ。私は着飾るのが好きなの。趣味よ、趣味」

「そうでしょ、うか」

「そうよ。貴女こそ、どうしてそんなに疑うの？」

「女の勘です」

「……」

「さつき言つましたよね。『隠しているつもりはない』って。ただの趣味なら、普通は隠すと思うんです。知られれば知られるほど、

周りから「うるさく言われるに決まっているんですから。だから貴方にとつて、女装することには何か意味があるんじゃないですか？」

「？」

あつて欲しい、という願望も少しある。

あの『彼』の弟が何を考えて女装をしているのか、知りたいと思つた。

「貴方が私を信用できない、と言つならそれでも構いません。でも私は貴方がどういう人間なのか、知りたいんです。だから私が王族として非常識な振る舞いをしていた理由をお話ししました。貴方にもできれば正直になつてもらいたいんです。口に出さなければ、お互いに理解なんてできるわけがありませんから」

突然、陛下が笑い出した。

面食らう私に、「失礼」と陛下は息も絶え絶えに断る。

「どうして兄上が貴女を可愛がつたのか、わかつた気がした」「は？」

「貴女は自分を恥じていない。それが羨ましかつたんだ」

「？」

勝手に納得されても、私には意味がわからない。私にもわかるようになつてもらいたいものだらうか。その気持ちを察していいわけもないのに、陛下はゆつたりと腕など組んで首を傾げる。

「私のこの姿には、意味があると言えばある。上手く説明できないが、そう 罪滅ぼし、かな」

「罪滅ぼし？」

失礼ながら、そんな殊勝な性格には見えないが。というか、なぜ女装が罪滅ぼしになるのか。

私の顔を見て、陛下は可笑しそうに目を細めた。唐突に、ああ似ているな、と感じた。『彼』もこんな顔で私を見下ろしていたことがある。顔のつくりは全く違うのに、初めて彼らが兄弟だと実感した。

「それは誰に対する罪滅ぼしですか」

わかるような気がしたが、敢えて訊ねた。陛下は苦笑する。

「それは訊かないでくれ。相手はもうとつゝの昔に私を許していて、私が勝手に思い悩んでいるだけだから　いや、許されたからこそ、かな。私は捻くれているから、『気にしなくていい』と言われても額面どおりに受け取れない。『もういい』と突き放されたように感じる。だからこういう恰好をして、『非常識』だの『変人』だの『気持ちが悪い』だの言われれば、少しば相手のことが理解できるかと思った……と言つても、何のことかわからないか」「よくわかりませんが……貴方がとてもその人のことを好きなのは伝わりました。嬉しいです」

「嬉しい？」

「私もその方がことが大好きですから。同士が見つかって嬉しいです」

そう言つと、陛下は本当に嬉しそうに笑つた。

「ありがとう」

これを読む時、お前はどんな顔をしているのだろう。

悲しそうな顔だろうか、それとも嫌悪や軽蔑に満ちた顔だろうか。そもそもこの手紙を受け取ることも拒むかもしないな。いや、すまない。お前を責めたいわけではないんだ。おかしいのは私だと。いつことは重々承知しているし、自分で隠し続けておいて理解されないことを嘆くのは筋違いといつものだろう。

……駄目だな。覚悟を決めたつもりだつたのに、上手く言葉が出てこない。

お前に見られたことについて弁解するつもりはない。私はドレスを着ようとしていた。そこにお前が入つて來た。それだけのことだ。なぜ？

ただ、着てみたかったからだ。ずっと着てみたいと思っていた。貴族の令嬢達が衣装や装飾品に金をかけるのは無駄遣いだと、お前は言つていたことがあるな。私はそうは思わない。私はずっと羨ましかつたんだ。誰憚ることなく着飾ることが許される彼女達が、とても羨ましかつた。

女性の格好をしたかつた、といつのはきっと正確ではない。

私は女性になりたかつたんだ。

理解できないか？あの時のお前はそういう顔をしていた。これが手紙で良かつたよ。目の前にいたら、きっとお互に辛かつただろう。責めたいわけじゃない。でも、最期まで否定されたら、と思うとお前と直接話す勇気がどうしても出てこなかつた。

私は臆病だ。

思えば幼いころから、自分がどうあるべきか、ということについて人一倍敏感な子供だった。私は王太子だし、いすれば王になるべき立場で、だからあらゆることを上手くこなさなければならぬ、

周囲の期待に応えなければならないと誰に言われるでなく察してい
たと思う。だから物心ついてからずっと抱えていた違和感も、私に
とつては罪でしかなかった。

最初にそれを自覚したのは、五歳の時だつたと思う。

母上に絵本を読んでもらつていた時だ。内容自体はよくあるもの
で、悪党にさらわれたお姫様を勇者が助けに行く冒険譚だつた。普
通と違うといえば、お姫様は結局、勇者に助けられる前に病氣で死
んでしまつたのだが、当時の私は思つたものだよ。何て可哀想なん
だろう、と。好きな人に会う前に一人きりで死ななくてはならない
なんて、何て可哀想なんだろう、と。

わかるか？

私はお姫様のほうに感情移入していたんだ。

男なのに、勇者にはこれっぽっちも興味がなかつた。「勇者様の
ように勇敢な男の子になれるといいわね」と母上に言われて、困惑
したこと覚えていいよ。

その時は、まだその程度のものだつた。男だからと言つて、必ず
しも勇者に憧れるというわけでもない。

だけど成長するにつれ、私の感じる違和感はどんどん強くなつて
いつた。

王として、心技体の全てが周囲より優れていなければならない。
その考えは理解できだし、重荷ではあつたが不満を持つたことはな
い。だけど剣を持たされて、叩かれ、怒鳴られ、「男子たるものこ
の程度で弱音を吐いてはなりません！」と言われるのだけは、耐え
難かつた。

それがおそらく、私が初めて「男」という性に恐怖感を抱いた時
だろう。

教官が怖い、という感覚とは違う。ただ何となく、教官に言われ
た「男子たるもの」のあるべき姿と、私自身が重なることはないだ
ろうということを漠然と感じ取つていて、それが得体の知れない恐
怖感となつっていたのだと思う。

私にそこそここの剣才が備わっていて、本當によかつたと思つよ。
でなければ、もっと早く破綻が訪れていただろ。

成長期になつて、体がはつきりと男の特徴を現してくると私の意識もはつきりと苦痛を感じるよになつた。

「」と伸びていく身長。しつかりとした肩幅。太い腕や腿。その全てが私は嫌で嫌でたまらなかつた。男として見れば、堂々として立派な体格を持つことは、むしろ自信になるはずだ。でも、私が考えたことと言えば、どうやってこの体を周囲から隠すか、ということだつた。

勿論、隠すなんて甚だ非現実的な話だ。

王太子である私は常に人目に晒されていたし、晒されても涼しい顔で堂々と立ち居振る舞うことが求められていた。味方の振りをして隙を窺う、毒蛇共に対して見た目の面でも侮られるわけにはいかなかつたから、武人らしい私の外見は武器にもなつた。

隠すどころか利用するべきものだ、私の体は。

その実、誰にも見られたくない、こんな体は気持ち悪い、と今にも叫び出したくなる衝動は、常に私の中についた。

口にしてはいけない感情だとわかつていた。口にしたところで、どうなると言うのだろう。周囲にどうして欲しいのか、私自身がどうしたいのか、そんなこともわからないのに、こんなわけのわからない鬱屈で自分以外の人間を悩ませることに、何の意味があるというのか。

わかつていた。私が我慢すればいいことは。それが、この上ない自己否定であつたとしても。

「王」という仮面が用意されていたのは、私にとって好都合だつたよ。『男』としての自分よりも「王」としての自分の方が、演じるには幾分楽な役割だつた。

私は王として、出来る限りのことをしたつもりだ。至らぬこともあつたが、全身全靈を傾けて國をよくしようと努力した。今にして思えば、私人としてけして満たされない自分自身を、せめて公人と

しては満足させようとしていたのかもしれない。差し迫った事柄があるわけでもないのに、常に焦燥は私と隣合させだつた。

一番、辛かつたのは「恋」を自覚した時だ。

相手は外遊に来ていた某国の王子だつた。無口な方だつたが、根は優しい人だつたと思う。バルトライヤにいる間は、年が近いこともあつて私が案内を務めることも多かつた。彼に会える日は、自分でも驚くほど心が弾んだものだ。それが気の合う友人に対する友情ではなく、異性として意識したことだと気付いたのは、彼が帰国して、結婚式の招待状が届いてからのことだつたけれど。

あの時ほど、自分を嫌悪したことはない。

笑顔で彼を祝福する私は、周りからは当たり前の姿に見えていただろうが、本人にしてみれば滑稽の一言だつた。友人の祝い事を心の底から喜べないばかりか、花嫁に嫉妬すらしていたのだ。私が彼女のように可憐で守りがいのある姿かたちをしていたら、彼は私のものだつたのに、と。考えるだけでも馬鹿馬鹿しい話だつう？肉体を取り換えることはできないし、こんな私に好意を寄せられても彼は迷惑なだけだつう。

それでも私は落ち込んだし、決定的に自分のことを嫌いになつた。何故、私はこんなおぞましい体を持つて生まれてしまつたのだろう。家臣や民が私を素晴らしい為政者と称えても、私は自分の体も魂も何一つ好きになはしない。それでいて、往生際も悪く、誰かに自分を認めて欲しい、必要として欲しいと願つてもいる。本当に、どうしようもない人間だ。長年の習慣で、表面を取り繕うことだけは出来たのは幸いだつた。

ルシアス、お前は信じないかもしれないが、私はお前に救われていたよ。

周りの者たちはしばしば私がお前に甘すぎると思っていたようだ。一応、自覚はしていた。お前は私に「国王」も「男性」も求めない、唯一の人間だつた。では何を求めていたのかと言わると、はつきりとは答えられないのだが……少なくともそれは私の求めていたも

のと極めて近かつたのだと、そういう気がする。だから私は自分を愛するようにお前を愛することができた。自分が得られないものを与えてお前を満たすことで、私自身も幸福を感じることができた。……この流れで頼むのは卑怯かもしれないが、母上を許してやって欲しい。

前に言った通り、私の記憶は曖昧だ。聞いた当時は、何のことかもわからなかつた。本気で探せば証拠を見つけることもできただろうが、私にはできなかつた。あの人は、哀れな人だ。突き放して正論で叩き潰すのは、せめて私以外の者に委ねたかつた。

無論、お前には母上を裁く権利がある。

父上がお前を顧みなかつたのも、母上がクリスティーネを妬んだのも、祖父母がお前を疎んじたのも何一つお前の責任ではない。

クリスティーネが生きていたら、お前はもつとたくさんのものを得られただろう。

だから、私は頼むことしかできないし、お前が母上を処刑したとしても恨みはしない。本當だ。

そして最後にこれだけは言つておきたい。

私はお前を許すよ。

お前は優しい子だ 少なくとも、私にとつては。こうじう形で別れを告げてしまえば、お前は自分を責めるかもしれない。お前には、そんなことで心煩わせて欲しくはない。あんな現場を見ればお前がああいうことを口にするのは当然だし、いつかこうなることはわかつっていた。

不思議なことに、今はとても穏やかな気持ちだ。
何を恐れることも思い悩むこともなく、本当に心安らかにあれて
いる。

私はやつと自由になれるのだ。

だからお前が悔いことなど、一つもない。
できれば 祝福して欲しい。私の自由を。私の死を。
そして忘れないで欲しい。

私が賢王でも良い兄でもなく、ちっぽけな人間であつたことを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3286j/>

ある国王の女装趣味に対する一考察

2010年10月8日14時10分発行